

今帰仁城跡周辺遺跡 範囲確認調査報告書

1986年3月

沖縄県今帰仁村教育委員会

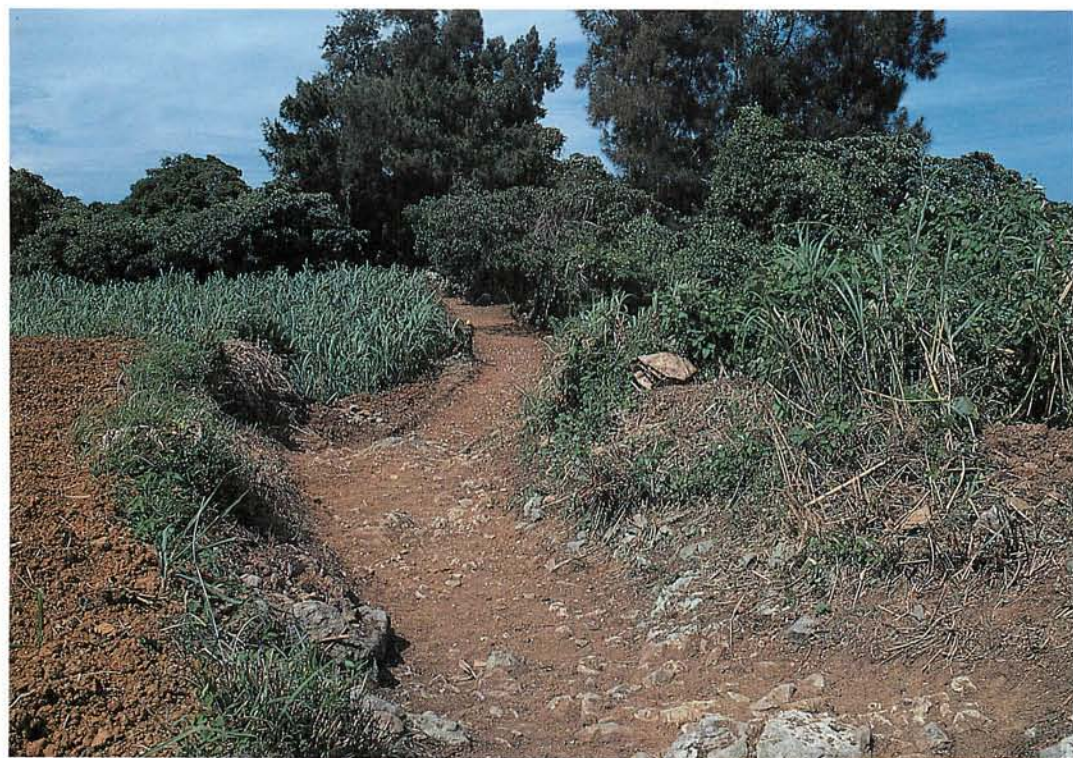
今帰仁城跡周辺遺跡 範囲確認調査報告書

1986年3月

沖縄県今帰仁村教育委員会



今帰仁城跡周辺の航空写真



今帰仁城跡北側の旧道(南側より)



第1号石積遺構(ミームングスク)西側より



第2号石積遺構(シニグンニ)西側より

序 文

本報告書は昭和59・60年度に国・県の補助を得て実施した今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査事業の概要を記したものであります。

調査は59年度に城跡北西側の発掘調査を主に、60年度は周辺遺構の確認調査及び平板実測を実施、その成果が挙がっているところです。これまでに今帰仁城跡周辺の遺跡は城跡と関連するものではないかと考えられていたもので、調査結果からそれを裏付ける格好で遺構や遺物が検出されました。

遺構として、集落跡のものと考えられる石垣やグスク名の付く方形状石積み、旧道跡、土留め壁、柱穴状遺構などが確認され、土器や中国陶磁器、鉄製品、石製品などの遺物も出土している。

これらの遺構や遺物から同周辺は今帰仁城跡の範囲に含まれることが考えられ、その保護が必要になっている。

城跡との関連や時期等については不明な事もあり、その詳細については今後の調査に委ねられます。

報告書を発刊するにあたり、本事業に対して御協力をいただいた関係各位に感謝を申し上げます。報告書が今帰仁城跡周辺遺跡の保護と活用にはば広く利用いただければと願っております。

1986年 3 月

今帰仁村教育委員会
教育長 大城勝三

例 言

1. 本報告書は昭和59年度と60年度に実施した今帰仁（北山）城跡周辺遺跡調査の成果を記録したものである。

2. 調査は文化庁（80%）、県（10%）の補助を受けて、今帰仁村教育委員会が実施した。

3. 1/50000の国土基本図は国土地理院発行によった。

4. 1/5000の地形図は今帰仁村役場発行によった。

5. 本書の執筆は松田朝雄・松川章であたり、編集は松川が行なった。

第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ－1・2、Ⅴ章 松川 章（県教育庁文化課）

第Ⅳ章3・4・5 松田朝雄（今帰仁村教育委員会）

第Ⅵ章 松田朝雄・松川 章

6. 資料整理は下記のメンバーで行なった。

洗浄・注記・実測 宮里末廣・上間恵子・玉城成子・神谷朝子・新城恵子・渡慶次純子

トレース 与那啓恵・新垣千恵子・比嘉優子・安里和美

写真撮影 松川章

7. 出土した資料については、すべて今帰仁村教育委員会の資料室にて保管している。

目

次

本文目次

第Ⅰ章	位置と環境	1
第Ⅱ章	調査の経過	4
	第1次調査	4
	第2次調査	7
第Ⅲ章	層 序	8
	第Ⅰ区	8
	第Ⅱ区	8
	第Ⅲ区	8
	第Ⅳ区	8
	第Ⅴ区	8
第Ⅳ章	遺 構	10
	1. 敷石遺構	10
	2. P i t 状遺構	10
	3. 石垣および土留め遺構	10
	4. 旧道	15
	5. 方形石積遺構	15
	第1号石積遺構(ミームングスク)	15
	第2号石積遺構(シニグンニ)	15
	第3号石積遺構	17
	第4号石積遺構	17
	第5号石積遺構(ターラグスク)	17
	第6号石積遺構(チンマーサ)	21
	第7号石積遺構	21
第Ⅴ章	遺 物	24
	1. 青 磁	24
	碗	24
	杯	25
	皿	28
	盤	28
	壺	29
	2. 白 磁	29
	碗	29
	皿	32
	遊具	33

3. 染 付	33
碗	33
皿	36
杯	37
小壺	37
瓶	37
4. 褐釉陶器	37
5. 三 彩	38
6. 緑 釉	38
7. 瑠璃釉	40
8. 翡翠釉	40
9. 備前焼播鉢	40
10. 土 器	40
11. ガラス製品	40
12. 石製品	42
キセルの雁首	42
砥 石	42
13. 骨製品	42
14. 貨 銭	42
15. 銅製品	42
16. 鉄製品	44
鉄 釘	44
溜状製品	44
笥状製品	44
鉄 滓	44
17. 食料残滓	44
貝 殻	44
獸 骨	45
魚 骨	45

第Ⅵ章	まとめ	46
-----	-----	----

挽回目次

第1図 今帰仁村の位置……………	2	第12図 西区石積遺構分布状況……………	20
第2図 今帰仁(北山)城跡の位置……………	3	第13図 青磁 碗・杯……………	26
第3図 グリット設定図……………	5	第14図 青磁 皿……………	27
第4図 層序……………	9	第15図 青磁 盤・壺……………	30
第5図 P i t 状遺構検出状況……………	11	第16図 白磁 碗・皿・遊具……………	31
第6図 P i t 状遺構検出状況……………	12	第17図 染付 碗……………	34
第7図 敷石およびP i t 状遺構検出状況……………	13	第18図 染付 皿・小壺・瓶……………	35
第8図 P i t 状遺構検出状況……………	14	第19図 褐釉・三彩・緑釉・瑠璃釉・翡翠釉……………	39
第9図 石垣および土留め遺構……………	16	第20図 ガラス製品……………	40
第10図 石積遺構周辺の地形……………	18	第21図 備前焼播鉢、石製品、骨製品、古銭……………	41
第11図 東区石積遺構分布状況および旧道……………	19	第22図 銅製品、鉄製品……………	43

表目次

第1表 人工遺物出土表……………	22	第5表 白磁碗観察表……………	32
第2表 青磁碗観察表……………	25	第6表 白磁皿観察表……………	32
第3表 青磁皿観察表……………	28	第7表 染付碗観察表……………	36
第4表 青磁盤観察表……………	29	第8表 貝種別出土表……………	45

P L . 目次

P L . 1 第Ⅰ区……………	49	P L . 14 第Ⅲ区No.10グリットの層序(東壁)……………	55
P L . 2 第Ⅱ区……………	49	P L . 15 第Ⅵ区No.5グリットの層序(南壁)……………	56
P L . 3 第Ⅲ区……………	50	P L . 16 第Ⅴ区No.2グリットの層序(北壁)……………	56
P L . 4 第Ⅳ区……………	50	P L . 17 第Ⅱ区No.3グリットのP i t 状遺構 検出状況……………	57
P L . 5 第Ⅲ区の代採作業状況……………	51	P L . 18 第Ⅱ区No.4グリットのP i t 状遺構 検出状況……………	57
P L . 6 第1号石積遺構の代採作業状況……………	51	P L . 19 第Ⅲ区No.6グリットのP i t 状遺構 検出状況……………	58
P L . 7 発掘調査状況……………	52	P L . 20 第Ⅲ区No.7グリットの石敷遺構 検出状況……………	58
P L . 8 発掘調査状況……………	52	P L . 21 第Ⅲ区No.10グリットのP i t 状遺構 検出状況……………	59
P L . 9 第Ⅰ区No.2グリットの層序(南壁)……………	53		
P L . 10 第Ⅱ区No.3グリットの層序(北壁)……………	53		
P L . 11 第Ⅱ区No.4グリットの層序(東壁)……………	54		
P L . 12 第Ⅲ区No.6グリットの層序(東壁)……………	54		
P L . 13 第Ⅲ区No.7グリットの層序(北壁)……………	55		

P L.22	第Ⅲ区No.14 P i t 状遺構検出状況	59	P L.45	青磁・皿内面	71
P L.23	第Ⅳ区No.5 グリットのP i t 状遺構 検出状況	60	P L.46	内外面	71
P L.24	第Ⅴ区No.1 グリットのP i t 状遺構 検出状況	60	P L.47	青磁・碗底部	72
P L.25	東区の石垣検出状況	61	P L.48	青磁・盤(1~5)、壺(6~8)	72
P L.26	旧道の石段、北側より	61	P L.49	白磁・碗	73
P L.27	旧道の縁石、北側より	62	P L.50	白磁・皿(9~14)、遊具(15)	74
P L.28	旧道・石敷の検出状況、南側より	62	P L.51	白磁・碗底部内面	74
P L.29	第1号石積遺構(ミームングスク) 西側より	63	P L.52	同外面	75
P L.30	第1号石積遺構(ミームングスク) 北西側より	63	P L.53	染付・碗	75
P L.31	第2号石積遺構(シニグンニ) 西側より	64	P L.54	染付・皿(1~5)、小壺(6) 瓶(7~9)	76
P L.32	第2号石積遺構(シニグンニ) 南側より	64	P L.55	褐釉(1~6・12)、三彩(7・8)、 緑釉(9)、瑠璃釉(10)、翡翠釉	77
P L.33	第3号石積遺構、東側より	65	P L.56	ガラス製品(勾玉1、小玉2・3)、備 前焼播鉢(4・5)、石製品(砥石6・7、 キセルの雁首8)、骨製品(9)、貨 銭(7~9)	78
P L.34	第4号石積遺構A、東側より	65	P L.57	銅製品(1~4)、鉄製品(鉄釘5~12、 溜状製品13、篋状製品14・15)	79
P L.35	第4号石積遺構B、西側より	66	P L.58	鉄滓	80
P L.36	第4号石積遺構C、西側より	66	P L.59	貝殻	80
P L.37	第5号石積遺構(ターラグスク) 南側より	67			
P L.38	第6号石積遺構(チンマーサ)A 南側より	67			
P L.39	第6号石積遺構(チンマーサ)B 東側より	68			
P L.40	第6号石積遺構(チンマーサ)C 南側より	68			
P L.41	第6号石積遺構(チンマーサ)C 北側より	69			
P L.42	第7号石積遺構、西側より	69			
P L.43	青磁・碗	70			
P L.44	同内面	70			

第Ⅰ章 位置と環境

国指定史跡今帰仁城（北山城跡）の所在する今帰仁村は、沖縄本島北部の東シナ海に突出した本部半島の北東部、東経127°58'、北緯26°48'に位置し、古宇利島および佐我屋島（無人島）の2つの離島からなる。面積39.37km²、人口9,709人（昭和61年4月末現在）で、サトウキビ、葉タバコ花卉等の比較的多彩な農業形態をみせる純農村である。

今帰仁村の地質は、北側の新生代琉球層群と、中・古生界に属する南側の与那嶺層および西側の今帰仁層の3つに分けられる。また、地形は村の中央部南側に標高289mの乙羽山がありそれから表面傾斜が15～30°の斜面を有する山地が東西に連なる。村の北側は石灰岩段丘の展開する平野部で、集落の多くは本地域にみられる。

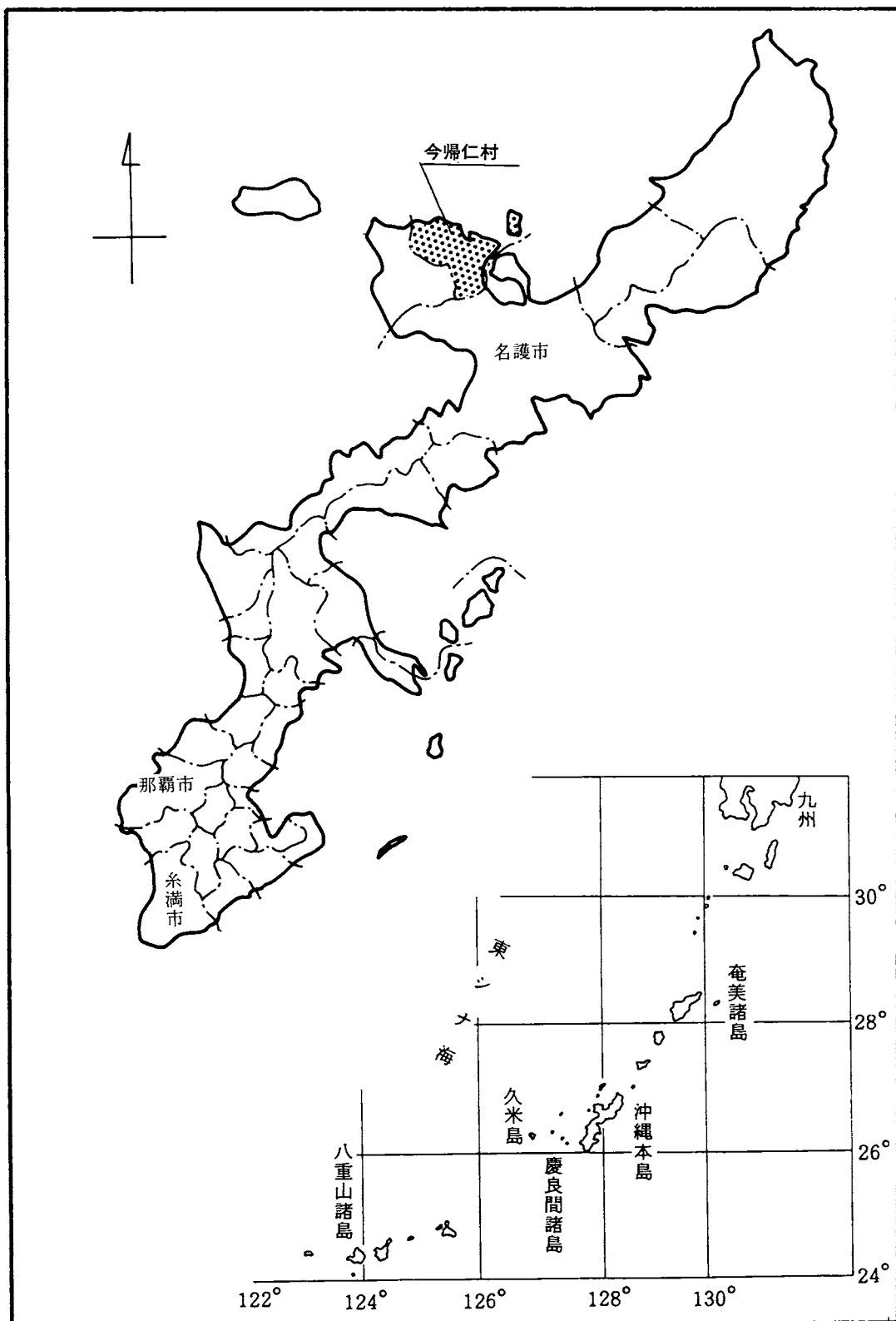
今帰仁城跡は、字今泊ハンタ原に所在し、今泊部落から南へ約1kmの距離にある。標高100mをはかる古生期石灰岩丘陵上に築かれ、俗称本丸・御内原・大庭・大隅・志慶真門などの郭からなる多郭式の城である。史跡指定面積78,868.5m²、石垣は古生期石灰岩で積まれ、高いところで約7m、幅約4m、総延長は約1.5km余に達する。城跡一帯は古生期石灰岩を基盤とするカルスト台地である。城の東は比高差70～80mの溪谷になっており、城の北約400mの距離にあるミームングスの北側まで続き、その下を志慶真川が蛇行している。北西部一帯はなだらかな段丘状の地形を呈し、南西部は円錐形の丘がみられるカルスト地形を呈している。

城跡周辺には、今帰仁城の出城ではないと言われるミームングスクとターラグスクが知られている（註1）。また、城の北側の段丘には石積遺構や石塁などがある（註2）。今帰仁村内における遺跡の分布状況は、ほとんどが北側の平野部で確認されており、丘陵部に認められるのはシイナグスク、ハナグスク等のグスク時代に属するものである。

城内の発掘調査は志慶真門、大隅、本丸で実施され、郭間の性格や機能あるいは造築法等がかなり解明されてきている。

註1 「今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ」今帰仁村教育委員会 1983年

註2 「ぐすく」沖縄県教育委員会 1983年3月



第1図 今帰仁村の位置



第2図 今帰仁(北山)城跡の位置

第Ⅱ章 調査の経過

調査は昭和59年度と60年度の2年度事業として実施された。第1次調査は石垣等の石積遺構の認められない地域を対象として、発掘調査を行なった。第2次調査は史跡指定地外に存在する石垣等の石積遺構や旧道等の確認と検出作業を行なった。

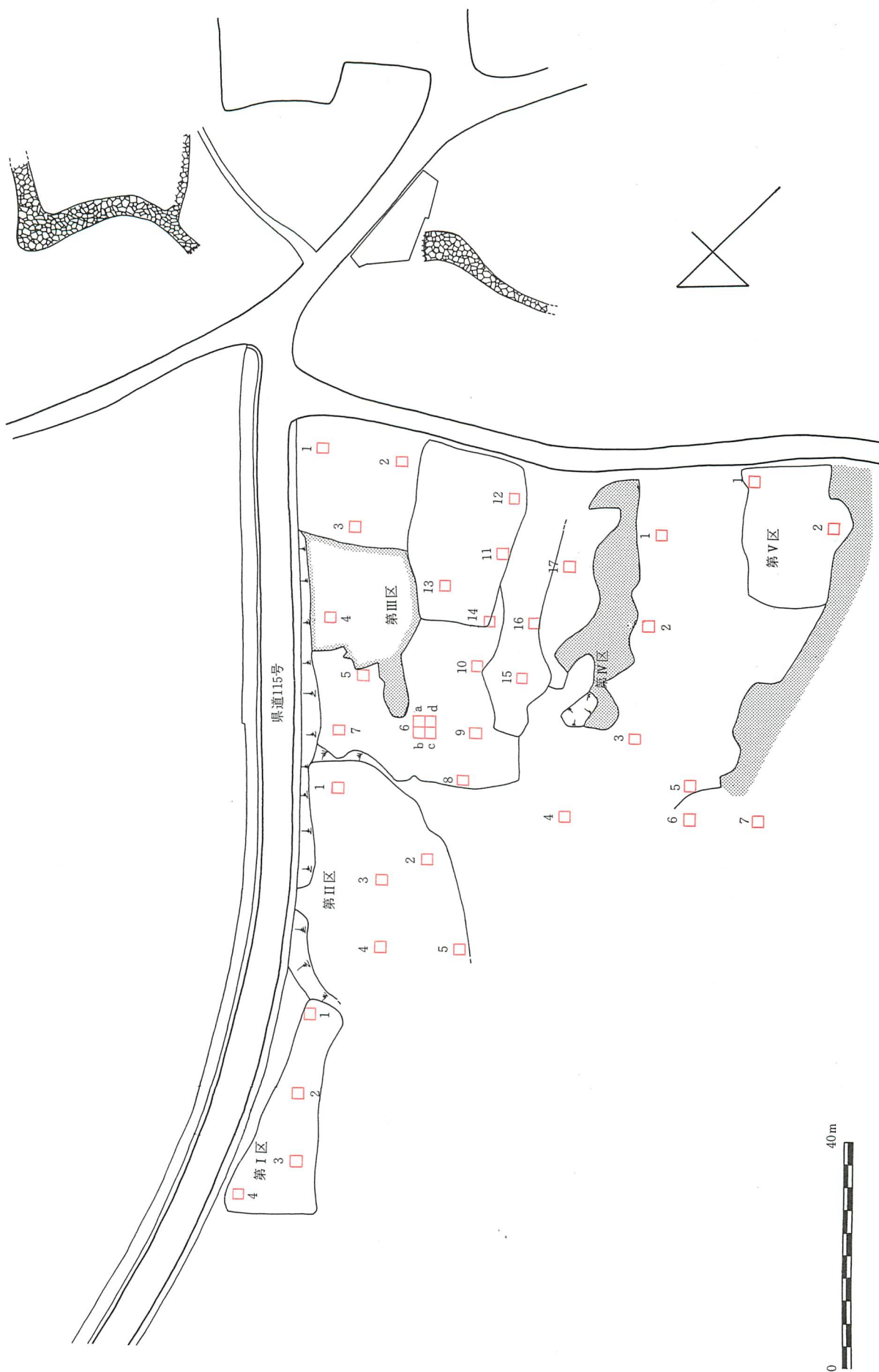
第1次調査

第1次調査は昭和60年1月21日から3月31日の期間で実施した。調査地は集落跡の存在が想定される、城跡の北西部にひろがる石灰岩段丘上とした。段丘は県道115号によって東西に二分される。東側には石垣等の石積遺構が確認されていることから、遺構の認められない西側を、発掘調査の対象地とした。

西側は概ね5段の石灰岩段丘からなり、各段丘は便宜上北側からⅠ区・Ⅱ区……Ⅴ区とし、現在、畑地として活用されていないⅢ区の代採作業から始めた。調査区全体には、城跡の北側の城壁上にある2点のトラバースポイント（X76,241.237 Y42,933.673 H94.698、X76,219.013 Y42,908.695 H95.511）を基準ラインとして、2m×2mの方眼を被せた。調査は各区ごとに遺物包含層および遺構の検出を目的として、Ⅰ区から発掘調査を始めた。

第1区は4グリットを設定し、発掘を行なったが、少量の遺物が得られただけであった。第Ⅱ区はサトウキビ畑で、収穫がまだなされてなく、最後に調査を行うことにした。第Ⅲ区は段差の小さい3つの段丘で構成され、区の西側は石灰岩が露頭している。本区は南側のグリットから発掘調査を行ない、No.6グリットで黒褐色の遺物包含層が確認された。また、No.6・8・9・10・13の5グリットでは、地山面においてPit状遺構が露われた。No.6グリットは、プランを把握するために拡張したのであるが、落ち込みが無数にあり、結局プランを把握することはできなかった。Pit状遺構の検出層である黄褐色土層は、層中に褐色土を混在しており造成層と考えられた。No.7グリットでは、表土層下部から第Ⅱ層の上部にかけて、礫群が認められた。第Ⅳ区は第Ⅲ区の西に位置し、石灰岩の露頭するところである。黒褐色土層はNo.17グリットで認められ、また、岩盤の穴の中に落ち込みを1例検出できた。第Ⅴ区は第Ⅳ区の南西にあるサトウキビ畑の地区で、2グリットを発掘調査した。No.2グリットで淡褐色土層は認められたものの、明確な遺物包含層はなかった。また、No.1グリットにおいて、Pit状遺構が3例検出された。第Ⅱ区はサトウキビの収穫された範囲の発掘調査を実施した。本区の中央部に設けたNo.3グリット以外は、地山あるいは岩盤までの深さが20～50cmと浅く、暗褐色土層はNo.3グリットとNo.4グリットの地山直上で認められた。No.5グリットを除く4つのグリットでPit状遺構が検出され、No.3、4の2グリットは造成層を検出層としている。

第Ⅱ区の発掘終了後、県道東側の第1号方形石積遺構と旧道の代採作業と併行しながら、調



第3図 グリット設定図

査区の平板実測を行なった。

第2次調査

第2次調査は昭和60年12月16日から同月27日、昭和61年1月7日から同月17日の期間で実施した。調査は史跡指定地外に存在する石垣、土留め石積、ミーミングスク等の方形石積遺構等の確認および検出作業を行なった。また、便宜上、県道115号の東側を東区、西側を西区とし東区より始めた。

東区の県道沿いには、石垣、石積遺構等が確認されており、南側より追求しながら代採作業を行なった。その結果、石垣は比較的広範囲にわたって築かれており、その内部に小規模な郭を形成していることが解った。付近一帯は段丘状の地形を呈するが、段の壁面に土留めの石積が認められた。また、石垣の北側には方形石積遺構と礫をドーナツ状に配石する円形の遺構が位置していた。この一帯の平板実測後、城跡の北東にある旧道の調査に移った。代採作業は旧道沿いの方形石積遺構（ミーミングスク）から始め、次に草木の繁茂する旧道を行なった。旧道は自然地形を活かして設けられ、石段を築いたり、凹地を造成しているところ等がみられた。また、ミーミングスクと旧道を隔てた反対側には、小規模な石垣跡が新たに検出された。

西区は石垣および土留め石積等は認められなかったものの、ターラグスクを含め4ヶ所の丘上で計8基の方形石積遺構が検出された。規模的には、ターラグスクが西区のミーミングスクと同程度のもので、他は小規模なものであった。後者には石積を3基有するものが2ヶ所で認められた。ターラグスクは大部分崩落し、保存状況は悪く、他は比較的良好であった。

第Ⅲ章 層 序

今回、発掘調査を実施した石灰岩段丘では、第Ⅰ区を除く4区で黒褐色の落ち込みを検出できたが、遺物包含層は第Ⅱ区のNo.2・3・4、第Ⅲ区のNo.1～3、6～8、10、13、第Ⅳ区No.5の計12グリットで認められた。第Ⅱ区のNo.3と第Ⅲ区No.6・7の3グリットは遺物包含層の保存は良いが、他は地山直上に僅かに残る程度であった。

第Ⅰ区

本区はNo.2グリットを除く3グリットは、表土層（耕作土）と黄褐色土の地山層あるいは基盤の石灰岩がみられた。No.2グリットは中位に淡褐色土層が認められ、少量の遺物が得られた。

第Ⅱ区

第1層は褐色の耕作土である。第2層は黒褐色土層で、No.2・3・4グリットで認められる。遺物を比較的多く含む層で、No.3グリットは層厚30cmをはかり、No.2・4グリットは地山直上に僅かに残る。No.3・4グリットの地山層の黄褐色土は、層中に褐色土を混在しており、造成層と考えられた。

第Ⅲ区

第Ⅰ層は褐色あるいは淡褐色の表土層である。第Ⅱ層は黒褐色の遺物包含層で、No.1・2・3・6・7・8・10・13の8グリットで認められた。No.6・7の2グリットは比較的良く残っているが、多くは耕作の際に攪乱を受けたものと考えられ、地山直上に僅かに残る状況であった。No.6・8・9・10・13の5グリットの地山層は第Ⅱ区No.3・4と同じ様相を呈しており、造成層であろう。

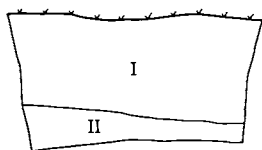
第Ⅳ区

7グリットを設けて発掘調査を行なったが、黒褐色の遺物包含層はNo.5グリットでみられた。No.6の第Ⅱ層は淡褐色を呈するものの遺物を混入しない無遺物層である。他の5グリットは表土層のすぐ下には黄褐色の地山あるいは基盤の石灰岩が位置する。

第Ⅴ区

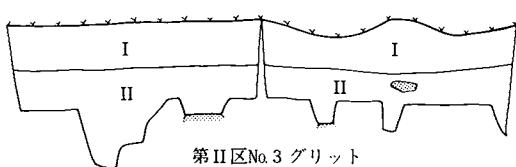
No.1グリットは、Pit状遺構が検出されたが、黒褐色の遺物包含層は認められなかった。No.2グリットは、第Ⅰ層は淡褐色の耕作土層で、下部では炭片の混入が認められた。第Ⅱ層は褐色土層で、少量の遺物を混入している。第Ⅳ層は黄褐色の地山層である。

E L. 73,380m 北 壁



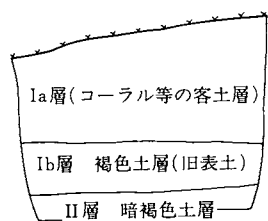
第Ⅰ区No.2グリット

E L. 76,987m 東 壁 南 壁



第Ⅱ区No.3グリット

E L. 80,468m 北 壁



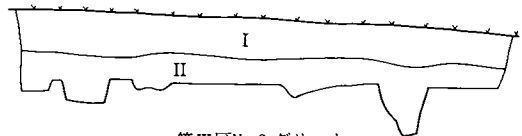
第Ⅲ区No.1グリット

E L. 78,047m 北 壁 東 壁



第Ⅱ区No.4グリット

E L. 79,732m 6 a 南 壁 6 b



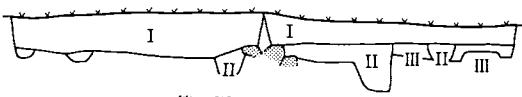
第Ⅲ区No.6グリット

E L. 79,436m 北 壁 東 壁



第Ⅲ区No.7グリット

E L. 80,341m 北 壁 東 壁



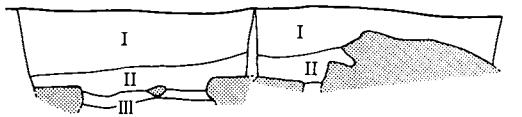
第Ⅲ区No.10グリット

E L. 80,663m 東 壁 南 壁



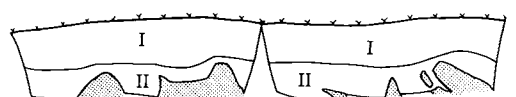
第Ⅲ区No.13グリット

E L. 82,515m 東 壁 南 壁



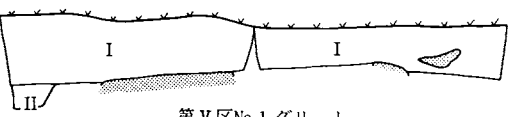
第Ⅳ区No.5グリット

E L. 84,368m 北 壁 東 壁



第Ⅳ区No.6グリット

E L. 79,885m 西 壁 北 壁



第Ⅴ区No.1グリット

E L. 79,416m 西 壁 北 壁



0 第Ⅴ区No.2グリット 2m

第4図 層序

第Ⅳ章 遺 構

第1次調査では敷石遺構とPit状遺構が検出され、前者は第Ⅱ区No.7グリットでみられ、後者は第Ⅰ区を除く4区のグリットで認められた。第2次調査では、石垣、土留め石積、旧道、計基の方形石積遺構が確認できた。方形石積遺構は名称を有するものと無いものがあり、そのため、東側から順に番号を付すことにした。

1. 敷石遺構

第Ⅱ区No.7グリットで検出された。表土層下部から第Ⅱ層上部にかけてみられ、グリットの南西側に片寄り、南東から北西に緩やかな傾斜を示している。また、礫は比較的大型のものを上部に、小型の礫を下部に配石している。今回の調査では、時間的制約のため敷石の広がり、あるいは性格等を究明するには至らなかった。

2. Pit 状遺構

Pit状遺構は径の小さい柱穴状のものと、土坑状のものとがあり、多くは前者に属するものである。

第Ⅱ区は発掘した4グリットで認められた。特にNo.3・4グリットでは多く検出され、この一帯が集落跡であることが考えられる。また、この2グリットのPit状遺構は、造成層に設けられている。

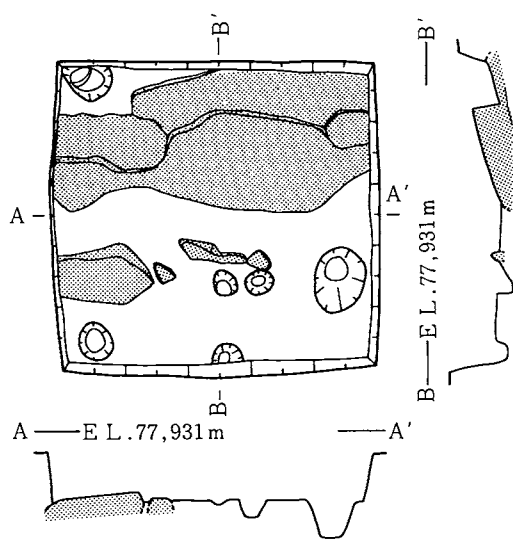
第Ⅲ区はNo.6・8・9・10・13の5グリットで検出された。この5グリットの遺構検出層は第Ⅱ区No.3・4グリットと同じ造成層である。No.6グリットはプランを把握するために拡張したが、Pitが無数にあり、プランを確認することはできなかった。No.6・8・9・10・13グリットの一帯が、集落跡である蓋然性は強い。

第Ⅳ区はNo.17グリットで、石灰岩の穴に黒褐色の落ち込みを1例検出できた。

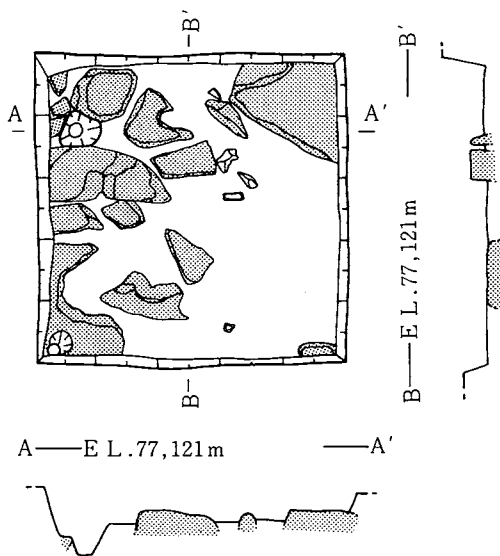
第Ⅴ区はNo.1グリットで、3例が検出された。本グリットの黄褐色土層も、褐色土の混在が認められ、造成層であろう。また、No.2グリットは南壁近くで1例認められた。

3. 石垣および土留め遺構

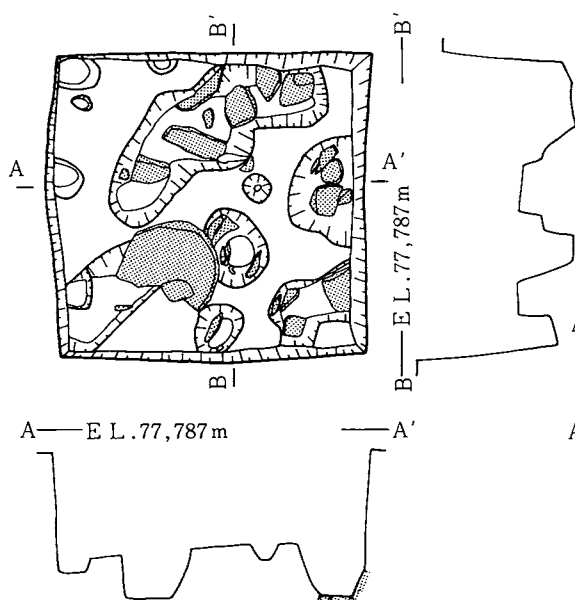
第1次調査区と県道を隔てた東側一帯にみられる。一帯は石垣が比較的良好な状態で残り、長いもので幅1.2m、高さ1.3m、長さ約40mである。現状では畑地となり、周囲に石垣が廻らされる。畑地と畑地には段差が設けられ、その壁面に石積みされ、土留めの機能をなしている。畑地より土器や中国陶磁器などが採取される。同所はアタイバルと称され、いくつもの石垣囲いの畑地や平場があることより、屋敷跡と考えられるところである。また、試掘調査により遺



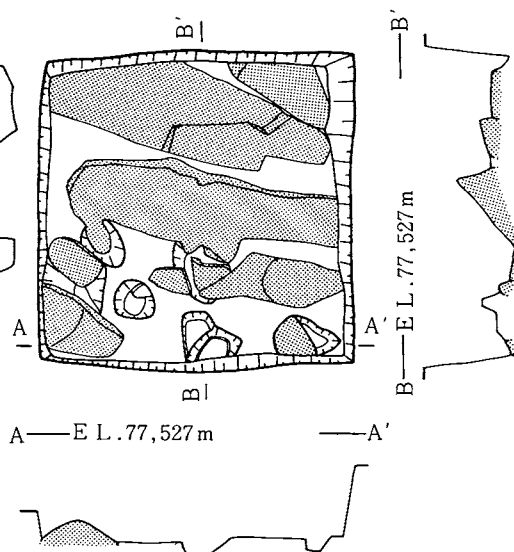
第II区No.1 グリット



第II区No.2 グリット



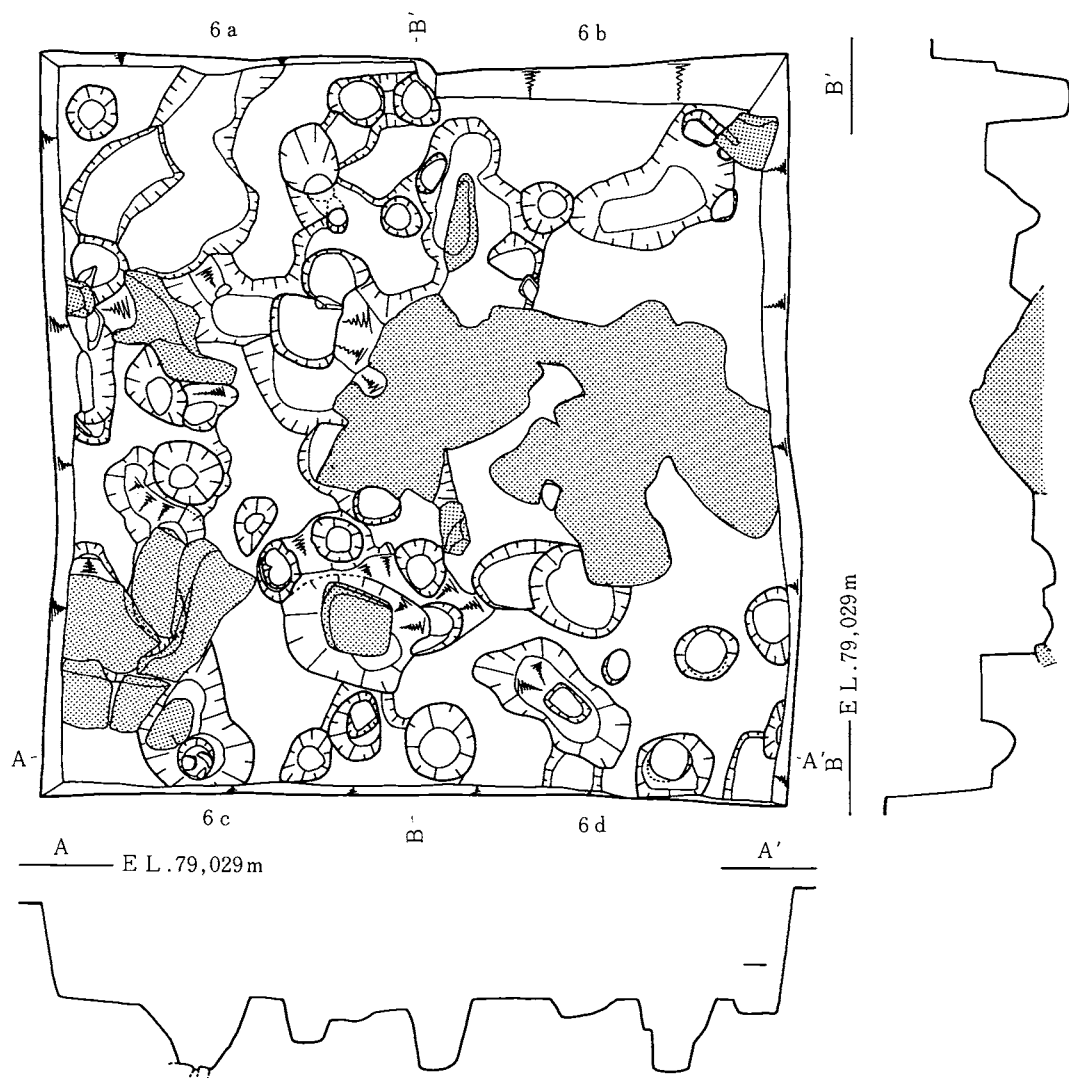
第II区No.3 グリット



第II区No.4 グリット

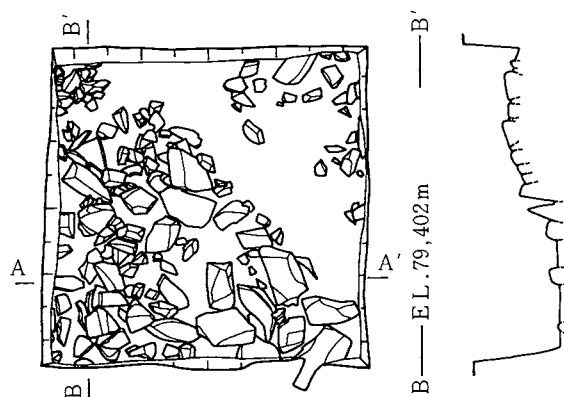


第5図 Pit状遺構検出状況

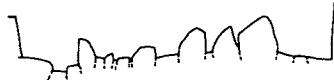


第Ⅲ区No.6 グリット

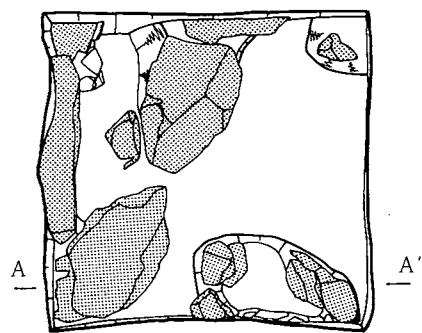
第 6 図 Pit 状遺構検出状況



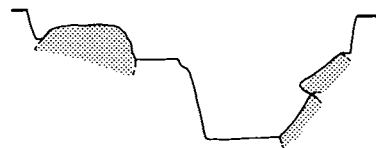
A — EL. 79,402m — A'



第Ⅲ区No7グリット



A — EL. 79,288m — A'



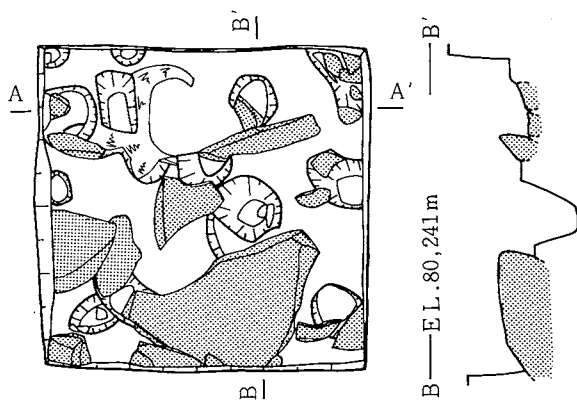
第Ⅲ区No8グリット



A — EL. 79,430m — A'



第Ⅲ区No9グリット



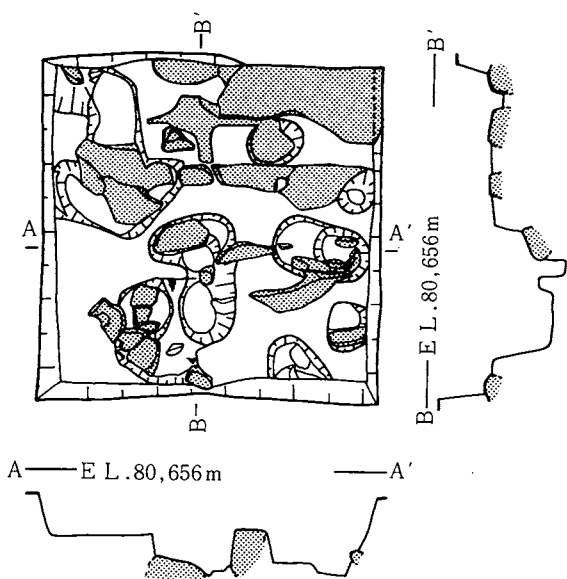
A — EL. 80,241m — A'



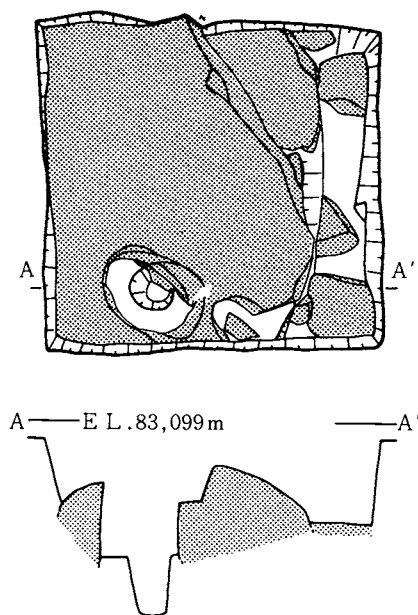
第Ⅲ区No10グリット



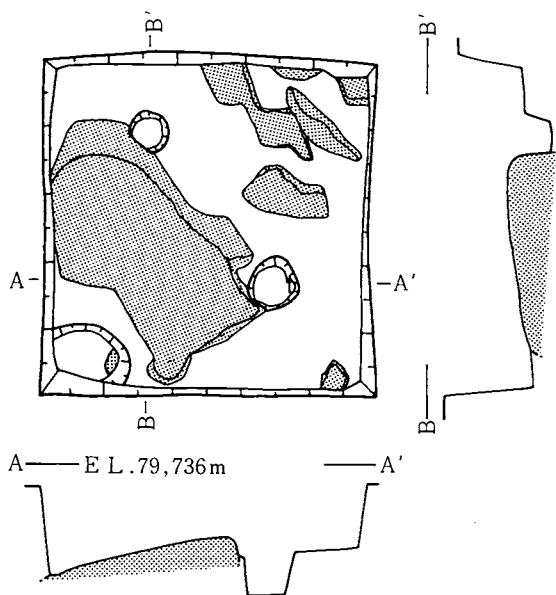
第7図 敷石およびPit 状遺構検出状況



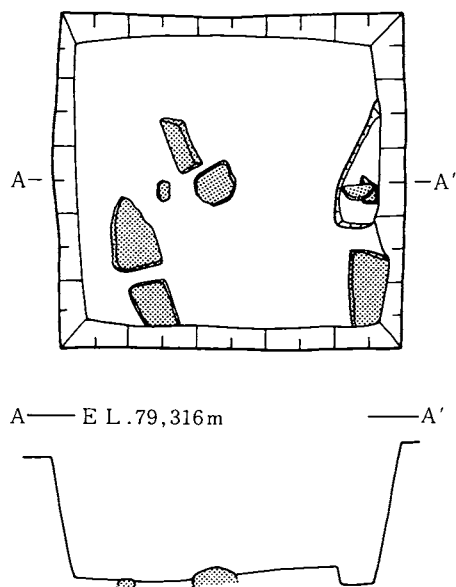
第Ⅲ区No.13グリット



第Ⅳ区No.5 グリット



第Ⅴ区No.17グリット



第Ⅴ区No.2グリット



第8図 Pit状遺構検出状況

物包含層と Pit 状遺構が確認できた。近くには「オーレーウドウン」と称される拝所や「シニグンニ」と呼称される方形石積遺構がある。

4. 旧 道

今帰仁城跡の北側約 400 m にあり、総延長 300 m をはかる。造られた時期は不明であるが、昭和初期頃までは城跡周辺の長嶽集落や志慶真集落とを繋ぐ重要な生活道として使用されている。旧道はグスク道、ハンタ道、アタイ道などと呼称される。グスク道のグスクは今帰仁城跡を指すもので、ハンタ道、アタイ道は道を界しての小字名の名称から呼ばれるようである。

道幅は 2 ～ 4 m のもので、所々に階段をこしらえる工夫がなされる。土留めの法面壁には人頭大の石を簡単に積み、道の両側に縁石を設ける箇所などがみられる。また、平坦部にいたっては径 5 cm 内外の礫が敷かれる。自然の岩盤を道として取り入れ、両側には道幅を標示する琉球松が植栽される。旧道の南側周辺には、ミーミングスクと称される石積み遺構や集落跡とおもわれるところがあり、旧道はそれらとの関連で検討されよう。この旧道が今帰仁城跡との結合で「歴史の道」としての環境整備が俟たれる。

5. 方形石積遺構

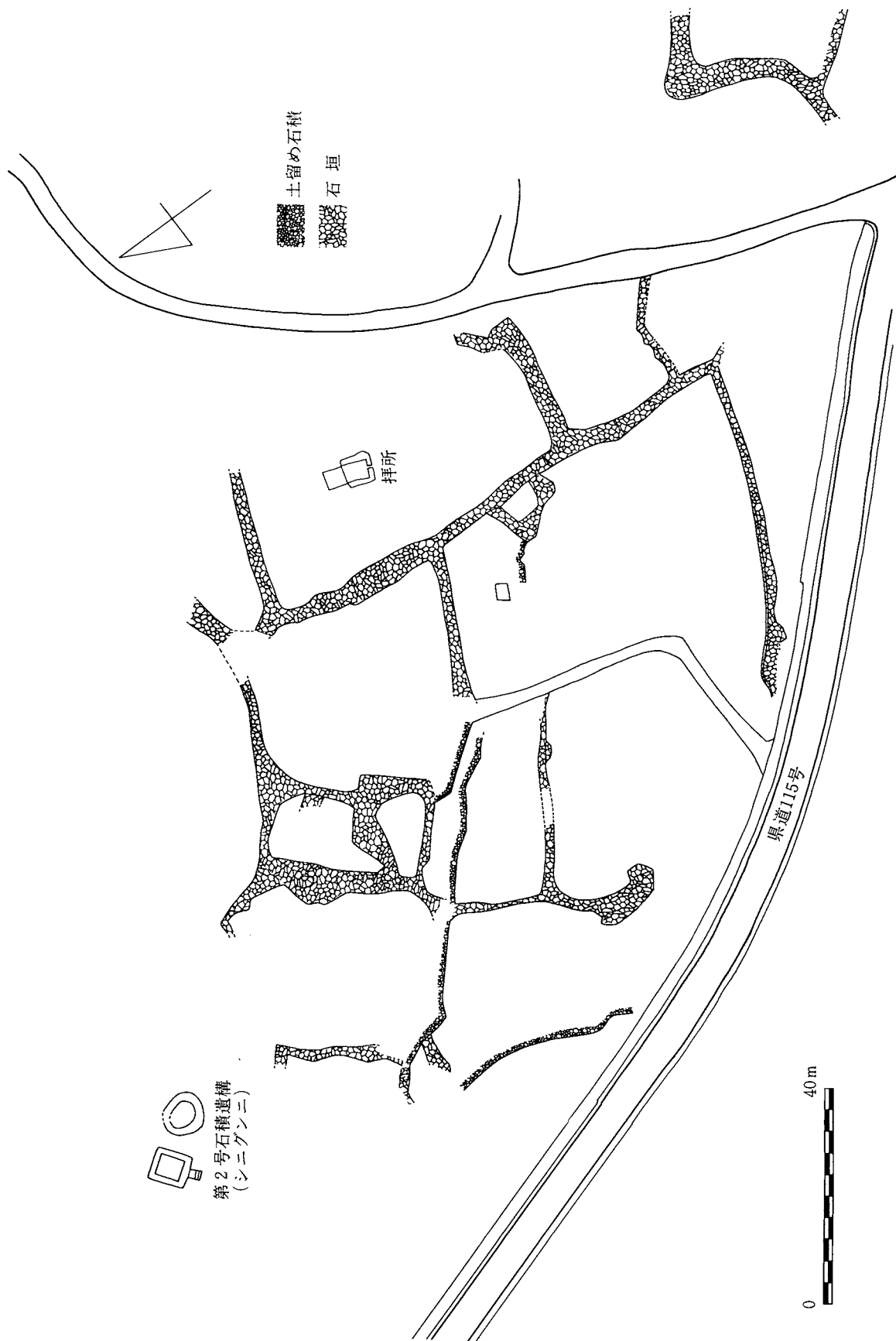
第 1 号石積遺構（ミーミングスク）

本遺構は今帰仁城跡志慶真門郭の北側約 500 m、標高 67.3 m の丘陵上に位置し、地元では「ミーミングスク」と称している。グスクの東側は急崖で、志慶真川が直下に流れる。北側から西側および南側にかけては、緩やかな傾斜地形を示し、北方に東シナ海を眺望できる見通しの良いところである。遺構の西側 10 m の距離に「旧道」が南北に走る。

遺構は代採作業の結果、平面形が方形で、3 段構成であることが解った。下段部は 18 × 19 m 最上段部が 12 × 9 m である。最上段の中央部に略方形をした浅い凹みがみられ、玉砂利が詰められる。なお、同所および周りからの遺物の採取はない。このグスクからは、城跡内の「志慶真門郭」や南西方向の「シニグンニ」などの遺構も確認できる位置関係にある。本グスクは今帰仁城の出城ではなかったか、ともいわれるが、その関連については本格的な調査を俟つことにしたい。

第 2 号石積遺構（シニグンニ）

シニグンニと称される遺構は、今帰仁城跡の北西約 150 m、標高 79.7 m のヤマグワールと呼ばれる丘陵上に築かれた石積遺構である。遺構は古生期の石灰岩盤上に造られ、北東側にミーミングスク、西側にターラグスク、チンマーサなどと、関連すると思われる遺構が見渡せる高所に位置している。平面形二重の方形で、石段が施設される。下段に 6.5 × 6.0 m、高さ 0.5 m の石積み土台を築き、その上に 4 × 4 m、高さ 0.7 m の石積みがなされ、天端高が揃えられてい



第2号石積遺構
(シニクンニ)

る。上段中央に直径1.2mの円形の浅い凹みがみられる。また、西側に長さ2.4m、幅1.8mの石段が取り付けられる。

南側に隣接して径5～6mの円形状の雑な石積遺構があって、それとの関連も注目される。

なお、シニグンニについて、地元では以前に拝所として利用していたようであるが、現在では遺構そのものも知られていない状況である。

第3号石積遺構

本遺構は城跡の西側約100m、標高70mの独立した丘陵上に造られるもので、その所在さえ知られてなく、名称もない。丘陵全体が石山で、遺構は岩盤上に石積みされる。規模は4×2.5m、高さ約1.5mで、長方形を呈し、方向軸は概ね南北に向いている。周囲は北から西側にかけて谷間で、見通しの効く位置にある。本遺構は他に階段や香炉といった施設を伴わず、祭祀等に使われた痕跡も見あたらない。また、本遺構にまつわる伝承や遺物の採取もなく、全く不明の遺構である。

第4号石積遺構

第4号遺構はナハサーラと称される標高85mの岩山に築かれるもので、3基が確認されている。遺構はほぼ東西に連なるように配置される。西側から、順にA、B、Cと仮称しておく。遺構は丘陵頂上部の岩盤上に直接積む簡素なものである。

A遺構は3×4mの雑な石積みで、崩壊が著しく、礫が周りに散在する。石積みの外壁は大型の礫を使用し、内側に人頭大の礫を詰めている。

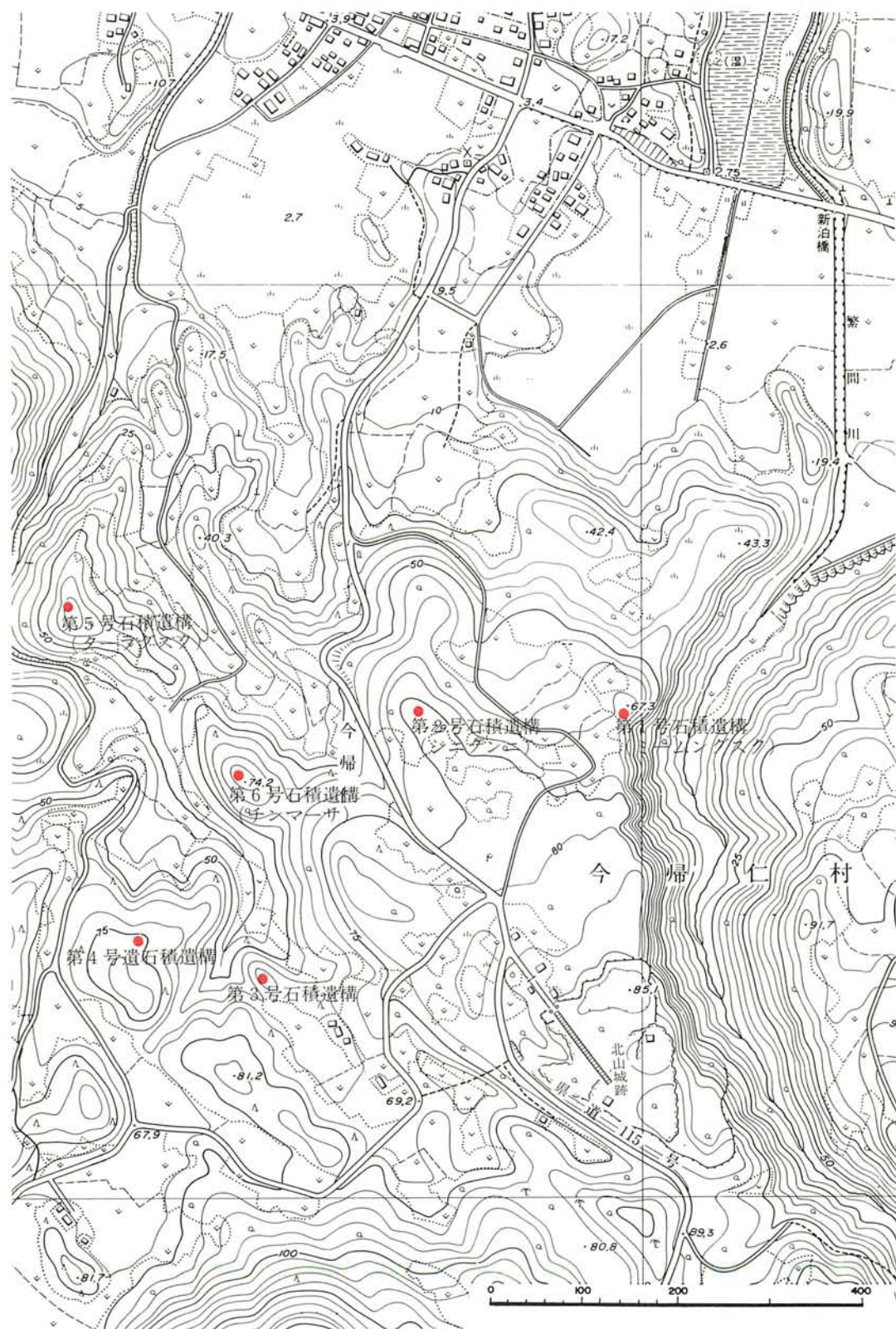
B遺構はA遺構と凹地を挟んだ東側12～13mの距離にあり、岩盤に直接積まれるもので、3基の内でも最も規模の大きいものである。4×4.5m、高さ4m程あり、基部は幅60～70cm、高さ1～1.2mの段を四方に廻らし、補強をなしている。他の2基よりやや北側に位置し、頂部は平場で、南から北へ傾斜している。石積みの保存状況はあまり良くはない。

C遺構はB遺構の東7mにあり、遺構の東側は急な崖で谷間となる。視界のひろがる位置にあって、他の石積遺構や城跡内の展望台も見渡せるところに立地している。遺構は6×2mの岩盤上に積まれ、規模は2×2m、高さ1mほどである。上面は南へ傾斜している。

これら3基の周辺から遺物は採取されず、遺構の機能等については不明である。

第5号石積遺構（ターラグスク）

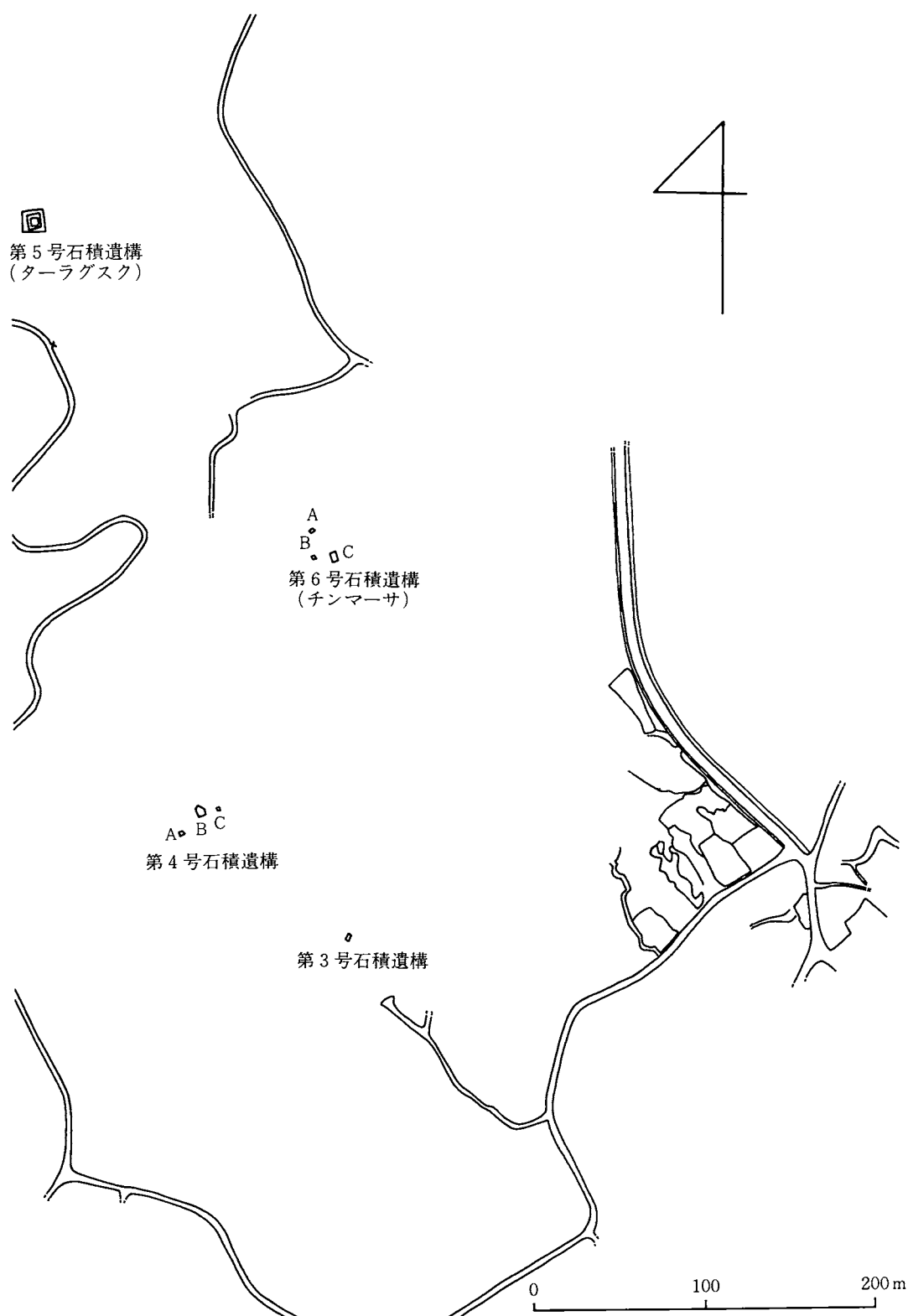
本遺構は第6号遺構（チンマーサ）から北西へ約200m、標高65m余の丘陵頂上に築かれる方形形状のもので、地元では「ターラグスク」と称している。周りには旧日本軍の掩体壕が掘られ、頂部東側は平坦地で、北および西部は急斜面を呈する。遺構は1辺約10mのもので、崩壊が著しく、原形を留めない状況である。中央部に5m四方の石積跡があり、段状の遺構であっ



第10図 石積遺構周辺の地形



第11図 東区石積遺構分布状況および旧道



第12図 西区石積遺構分布状況

たものと思われる。遺構の東側には長さ10m、幅 1.2m、高さ50cmの盛土がある。呼称については知られているが、それ以外については不明である。

第6号石積遺構（チンマーサー）

第2号石積遺構（シニグンニ）の西約 200m、標高74.2mの丘陵上に築かれる3基の石積みで、付近はシンミヌファイと称され、地元ではこれらを総称して「チンマーサー」と呼んでいる。東にシニグンニ、北西にターラグスクを見通し、南北に並ぶように配される。北側から順にA、B、Cと仮称しておく。

A遺構は石灰岩の岩盤を利用して築くもので、規模は3×2.2mの方形を呈し、高さ1.5mを計る。中に90×90cmの方形でやや深い凹みがみられ、人為的な破壊の感じを受ける。南壁に崩れがあり、周囲に礫が散在する。

B遺構はA遺構の南15mにあり、規模は2.1×2.6m、高さ1m余である。本遺構も崩落しているところがあり、人為的に荒らされた感じを受ける。以前には人骨が納められていたようであるが、確認できない状況である。周辺は平坦でテラス状になり、土留め状の縁石を廻らす箇所があり、詳細な調査が必要である。

C遺構はB遺構から連なる幅1m、長さ10mほどの帯状の石塁によって繋がる。3基のうちで最も大きく、4.5×5mのもので、中央部に1×1.5m、深さ30cmほどの長方形の凹みがみられる。遺構は自然の岩盤上に築かれ、南面は切り立つ岩盤面をそのまま利用し、その上に積み上げている。高いところで2mほどである。また、南側岩盤面に寄り重ねるかたちで、幅60cm、長さ6m、高さ0.7～1mほどの二重積みも確認される。

B遺構では納骨がされていたことより、墓として利用されたことも考えられる。

第7号石積遺構（ミーパンガーシルシ）

6号遺構（チンマーサー）の南西約 300m、標高70mの大きな岩盤上に造られるもので、地元では「ミーパンガーシルシ」と称している。遺構は東西に5m、南北に4mの長方形のもので、壁の最も高いところで1.3mほどである。

積み方は雑で壁面は崩れかかっている。遺構は以前から知られていたようであるが、禁忌な場所（墓）として足を踏み入れなかった、とのことである。東西方向は視界が効くところである。他には遺構がなく、また遺構周辺からの遺物の採取も得られてない。

いつ頃、何のために造られたかは明らかでなく、今後の調査をまつことにしたい。

第1表 人工遺物出土表

区	クリット	層	青磁	白磁	染付	褐釉陶器	三彩	緑釉	瑠璃釉	翡翠釉	天目	備前焼	土器	ガラス製品	石製品	骨製品	貨銭	銅製品	鉄製品	合計
I	1	I	12		1	1								1						15
		II																		
	2	I	14	2		8							1							25
		II	2	1	1	5														9
	3	I	7	1															1	9
		II																		
	4	I	4	1																5
		II																		
	小	計	39	5	2	14							1	1					1	63
II	1	I				2											1			3
		II				1												1	1	3
	2	I	7	2																9
		II																		
	3	I	32	1	14	19														66
		II	41	8	7	18							3	1	1					78
	4	I	33	6	9	22							1							71
		II	2		1															3
	5	I	1		1	3														5
		II																		
	小	計	116	17	32	65							4	1	1	1	1		1	239
III	1	I	20	1	2	8														31
		II	14	3	1	15														33
	2	I			1	2														3
		II	4	1	1	2							1							9
	3	I				1														1
		II	3			17														20
	4	I	1			3														4
		II																		
	5	I	8	1	1	2														12
		II																		
	6 a	I	31	12	17	41	1	1	1			1	1	1						107
		II	31	8	9	36							1						3	88
	6 b	I	82	15	23	72		1		1										194
		II	56	19	12	77					1						1			166
	6 c	I	64	14	21	67													1	167
		II	66	9	16	46														137
	6 d	I	72	21	27	62														182
		II	47	10	13	73						1						2		146
	7	I	59	6	9	78							2							154
		II	8		1	12												1		22

III	8	I	12	1	1	4							1						19	
		II	23		6	23							3					1	56	
	9	I	19	3	9	15												1	47	
		II																		
	10	I	28	8	27	29	1						2		1			1	95	
		II	1	1															2	
	11	I		1	2	6											1	1	11	
		II																		
	12	I	4			3													7	
		II																		
	13	I	18	1	3	11													33	
		II	16		3	7							3						29	
	14	I		1	3	2													6	
		II																		
	15	I																		
		II																		
	16	I																		
		II																		
	17	I	4	1	1	3													9	
		II																		
	小	計	691	137	209	717	2	2	1	1	1	2	14	1	1		2	3	8	1790
IV	1	I		1	1	3													5	
		II																		
	2	I				6													6	
		II																		
	3	I	4			4													8	
		II																		
	4	I	5			3													8	
		II	17		2	14													33	
	5	I	2	2	1	5							2						12	
		II	1			2													3	
	6	I	8	1	3	5							1						18	
		II											12					1	13	
	7	I	2		1	3													6	
		II																		
小	計	39	4	8	45							15					1	112		
V	1	I	13	5	2	4													24	
		II																		
	2	I	33	4	6	28												1	72	
		II	12		1	10											1		24	
	小	計	58	9	9	42											1	1	120	
不		明	1		1	2						1						5		
合		計	944	172	261	885	2	2	1	1	1	2	35	3	2	1	3	4	12	2231

第Ⅴ章 遺 物

今回の調査で検出された遺物は、青磁、白磁、染付等の中国製陶磁器、備前焼の播鉢、土器、ガラス製品、石製品、骨製品、貨銭、銅製品、鉄製品、鉄滓、貝殻、獣魚骨などが得られた。

1. 青 磁

青磁は最も多く出土したもので、碗、杯、皿、盤、壺の5器種が認められた。復元して器形の窺えるものはなく、ほとんど小破片であった。

碗（第13図1～13）

1は内面に草花文を施すもので、比較的精良な製品である。外体面にも文様を施しているが釉が厚く、気泡を多量混入しているために、判然としない。

2, 3, 4の3点は、外体面に幅広の無鎬蓮弁文を施すもので、この種の資料は9点の出土があった。2は体部下半に片切り彫りの幅広蓮弁文、内面に草花文を施している。3は口縁部の直口するもので、暗緑色釉が比較的厚く施釉され、内外面に粗い慣入を伴う。4は口縁端が微弱な内湾を示すもので、淡緑色の失透釉がかかる。

細線刻蓮弁文を施すものは68点（口縁資料）の出土があった。5は弁先が波状に便化する直口口縁碗で、口径14cmを測る。6は蓮弁文の弁先を省略したもので、濁黄緑色の失透釉がかかる。

雷文帯の施されるものは16点の出土があり、志慶真門郭出土の雷文帯碗の分類に従えばAタイプ（篋描きの雷文帯を外体面上部に廻らすもの）15点、Bタイプ（スタンプの雷文帯を内・外体面上部に廻らすもの）1点であった。第13図7と8に示したのはAタイプに所属するものである。7は雷文を独立させて施文する直口口縁で、口縁に計9個の雷文を施すものである。文様は下位にも展開していたようで、普通この種の雷文帯碗の胴部にはラマ式蓮弁を施文することが多い。8は雷文帯の下位と内面に刻花を施すもので、透明度のある淡緑色釉の施釉される直口口縁碗である。

無文の碗と認められる確実な資料は27点あり、玉縁状口縁を呈するもの5点、外反口縁10点、直口口縁14点であった。第13図9に示したものは直口口縁の資料で、素地、釉とも粗悪なものである。

碗底部と考えられるものは第13図10・11・12・13に示したものである。10は内底部に刻花を施文している。外底は露胎にされ、暗緑色釉が施釉されるが、畳付は褐色に焦げるところがある。11は高台を若干外開きにつくるもので、外底中央部は円錐状に突出している。12は幅広の無鎬蓮弁文を高台際まで施すもので、碗あるいは皿の底部と考えられるが、とりあえず本項に含めておく。13は高台外面に淡緑色釉、内底部と外底内は淡青白色釉を施すもので、内底

部には黒紫色に発色する呉須も認められる。本品は造り、施釉法等から14世紀前半の砧様式を意匠したものと思われる。

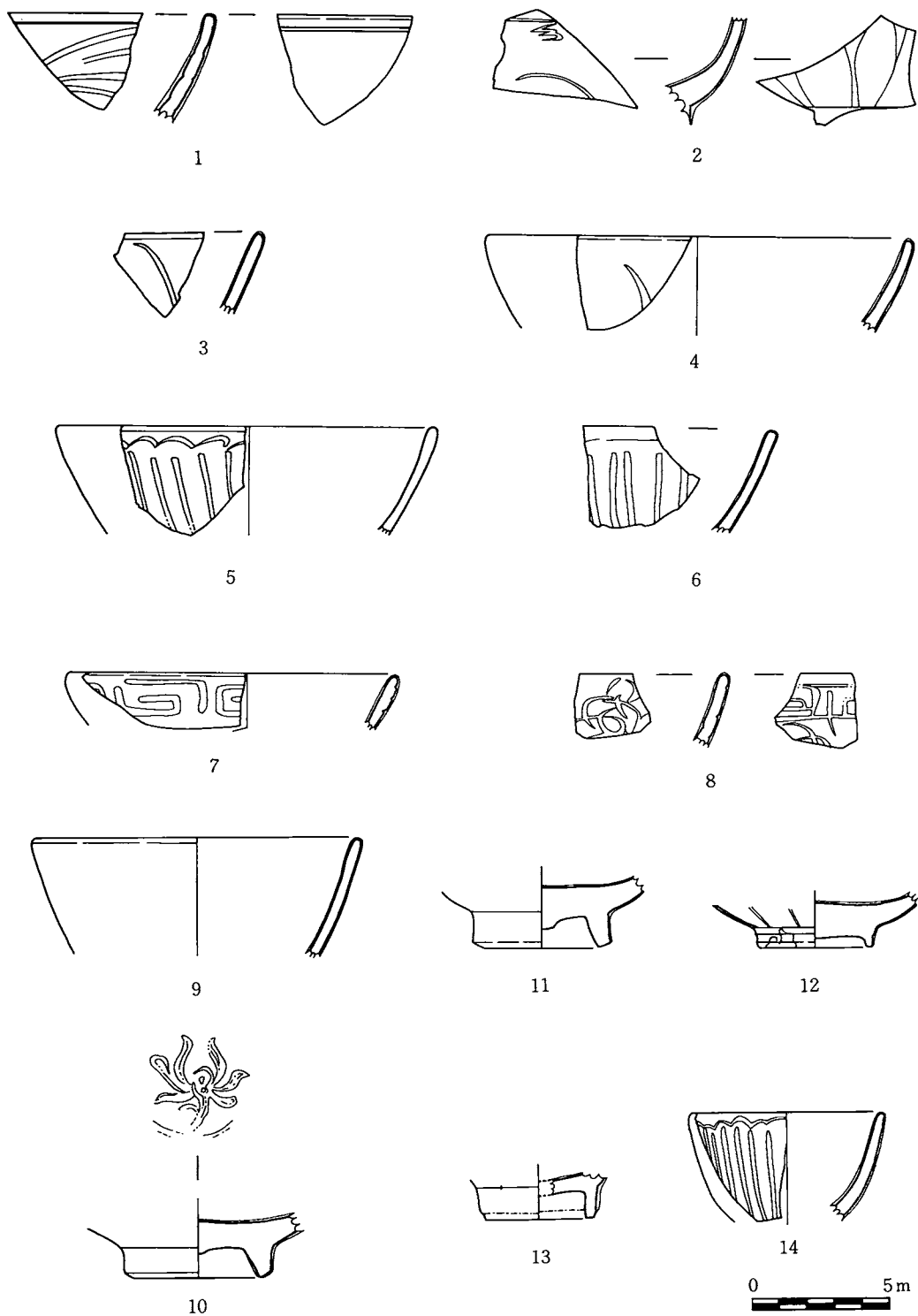
第 2 表 青磁碗観察表

挿図番号 図版番号	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	釉 色	慣 入	文 様	備 考
1		淡灰白色微 粒子	釉は厚く施釉さ れ、気泡を多量 含む	濃緑色	な し	外－？ 内－草花文	精良な製品である 第Ⅲ区12GⅠ層
2		〃	内外面ともやや 厚い釉がかかる	外－暗緑色 内－緑 色	外面の腰部 に荒い慣入	外－無銘蓮弁文 内－草花文	第Ⅱ区3GⅡ層
3		灰白色微粒 子		淡緑色	内外面に荒 い慣入	外－無銘蓮弁文 ？	第Ⅲ区6G P i t 13
4	15.6	白色微粒子	失透	淡緑色	〃	外－細線刻蓮弁 文？	第Ⅴ区2GⅡ層
5	14.0	淡灰白色微 粒子		灰緑色	内外面に細 い慣入	外－便化した弁 先を描く細 線刻蓮弁文	第Ⅴ区2GⅠ層
6		灰色のやや 粗粒	失透	濁黄緑色	外面に荒い 慣入	外－弁先を省略 した窠彫り の細線刻蓮 弁文	第Ⅲ区2GⅠ層
7	12.0	淡灰白色微 粒子		淡緑色	な し	外－口縁部に雷 文帯	雷文は口縁部に 9個施される 第Ⅱ区5GⅠ層
8		〃		〃	〃	外－口縁部－雷 文帯 胴部に刻花 文 内－口縁部に刻 花文	第Ⅲ区6GⅠ層
9	12.0	灰色のやや 粗粒子		灰緑色	内外面に細 い慣入を伴 う		第Ⅲ区10G P i t 1
10	5.4	灰色微粒子	高台内途中から 外底は露胎	暗緑色	な し	内底に印花文	第Ⅲ区7GⅡ層
11	5.0	灰色のやや 粗粒子	高台内面と外底 は露胎	〃	〃		外底中央部は円 錐形状に突出 第Ⅲ区7GⅡ層
12	4.2	灰色微粒子	畳付から外底内 は露胎 高台外面は粗く 施釉される	外－暗緑色 内－淡緑色	〃	外－細線刻蓮弁 文を高台際 まで施文	第Ⅲ区6G P i t 11
13	4.0	白名微粒子	高台外途中から 外底は露胎	外－淡緑色 内底と外底 は淡青白色	〃	内底に染付が施 される。	第Ⅱ区1GⅡ層

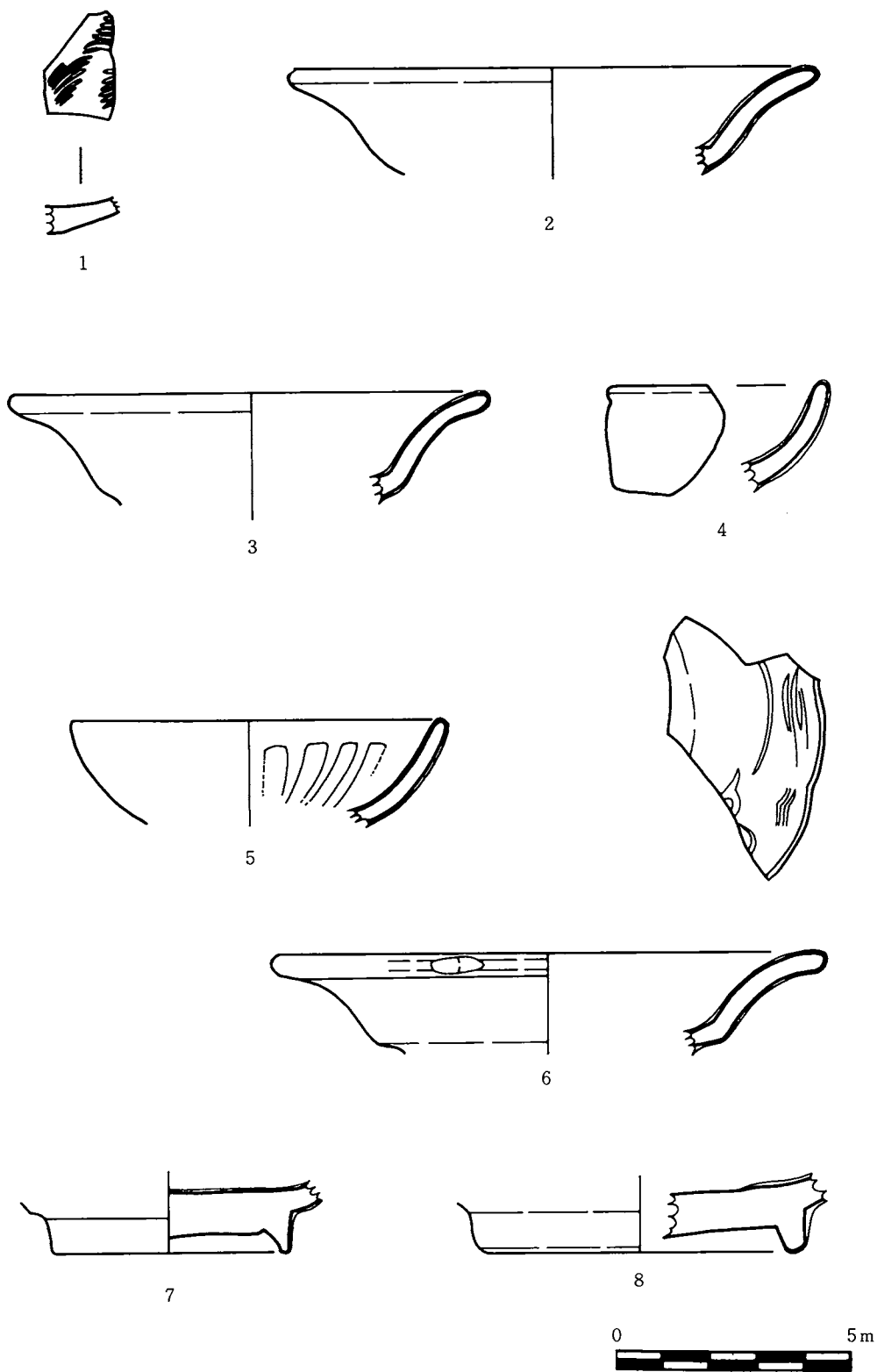
注 G－グリット

杯（第13図14）

口径約7センチをはかる直口口縁で、外体面には弁先が波状に便化する細線刻蓮弁文を施している。緑色釉が施釉され、外体の釉表面には微細な孔が認められる。素地は白色微粒子である。第ⅡグリットⅠ層の出土。



第13図 青磁碗1~13、杯14



第14図 青磁皿

皿

青磁皿は第B図に示したもので、口縁部5点、胴部1点、底部2点が確認できた。1は朱光青磁と呼ばれるもので、器内面に櫛描き文が施される。菰荀底皿であろう。2と3は口縁部の外反する腰折皿で、3は口縁端部が若干丸味をもつ器形である。2は腰折部にはトビカンナの成形痕を残す。6と5は口縁部の直口する小型皿で、5は器内面に篋描きの幅広連弁文を施している。4は口唇部がラマ式連弁の弁先形の稜花状に凹む稜花皿である。内面口縁部には口唇の弁先に合わせた3本の櫛描文、胴部に印花文が施される。7・8は皿底部と考えられるもので、7は外底内が露胎で、高台内際に快りがみられる。8は直口口縁皿の底部と考えられ、内底は施釉後、円形に掻きとられる。外底は露胎で、平坦に削り出される。

第3表 青磁皿観察表

挿図番号 図版番号	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	釉 色	慣 入	文 様	備 考
1		灰白色微粒子	釉は薄く施釉される 畳付は露胎である	淡灰白色	な し	内底に櫛描文	朱光青磁 第Ⅱ区4GⅠ層
2	11.4	淡灰白色微粒子	内面は薄く、外面は比較的厚く施釉 失透釉である	青緑色	〃		第Ⅲ区表採
3	10.2	灰白色のやや粗粒子	内外面ともほぼ均一に施釉される	淡緑色	内外面にやや荒い慣入		第Ⅱ区3GⅡ層
4		淡灰白色微粒子	釉は比較的厚く施釉される	〃	な し		第Ⅲ区7GⅠ層
5	8.0	白色微粒子		暗緑色	〃	内面に篋描きの幅広連弁文	第Ⅰ区1GⅠ層
6	11.8	灰白色微粒子	内外面とも薄く施釉	淡緑色	〃	内一口縁部に3本の櫛描き文 胴部にラマ式連弁文	第Ⅲ区6G Pit 7
7	5.0	〃	高台内面と外底は露胎	〃	〃		高台内は浅く削られる 第Ⅲ区17GⅠ層
8	7.0	〃	内底は施釉後掻きとる 高台内面と外底は露胎	〃	内外面に荒い慣入		外底は平坦に削り出される。 第Ⅰ区1GⅠ層

注 G—グリット

盤

盤は第15図1～5に示したもので、口縁部3点、底部2点である。口縁部資料は罌縁盤に属するもので、底部も器形からして同種のものと思われる。

1は罌上面を斜めに造るもので、内面胴部に釉の濃いところがあるが、文様かどうか判然としない。2は内面胴部に幅約7ミリの篋彫り連弁文が施される。3は罌上面が1・2より広くつくられ、内面胴部に櫛描き文を認めるが、釉表面の風化のため不明瞭である。4・5の底部

は罌口縁器形のものであろう。4は暗緑色釉が畳付け、外底まで施釉される。5は高台外が若干丸味をもつもので、淡緑色釉が施されるが、内底と外底内は極めて薄くなされ、白色を帯びた色調となっている。

第 4 表 青磁盤観察表

挿図番号 図版番号	名 称 又は 仮 称	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	釉 色	慣 入	文 様	備 考
1	罌縁口 縁		淡灰白色の やや粗粒子	比較的厚めに施 釉される	黄緑色	内外面に細 い慣入		第Ⅲ区 7 G I 層
2	"		灰白色微粒 子	"	淡緑色	内外面に荒 い慣入	内面に篋彫りの 蓮弁文	第Ⅱ区 3 G II 層
3	"		"	"	淡青緑色	な し	内面に櫛描き文	文様は器面風化 のため不明瞭 第Ⅴ区 2 G I 層
4	罌縁口 縁器形 の底部		淡灰白色微 粒子	比較的厚目の釉 を畳付および外 底まで施釉	暗緑色			第Ⅱ区 3 G I 層
5	"		"	内底はやや厚く 高台と外底は薄 く施釉される	淡緑色	内面に荒い 慣入		第Ⅲ区 6 C G II 層

注 G－グリット

壺

青磁壺は大壺の酒会壺が得られた。口縁資料はなく、蓋、胴部・底部が得られた。その中で胴部 2 点、底部 1 点を第 15 図 6・7・8 に図示した。

6 は二本の界線と無鎬蓮弁文の施される胴下半部の資料である。内面には轆轤成形痕を残す。釉調は外面暗緑色、内面淡緑色を呈し、素地は灰白色微粒である。第Ⅴ区 No. 2 グリット I 層の出土。

7 は片切り彫りの荷葉文類以の文様を施文する。素地は淡白色微粒で、釉調は外面緑色、内面淡緑色を呈する。第Ⅲ区 No. 6 C グリット II 層の出土

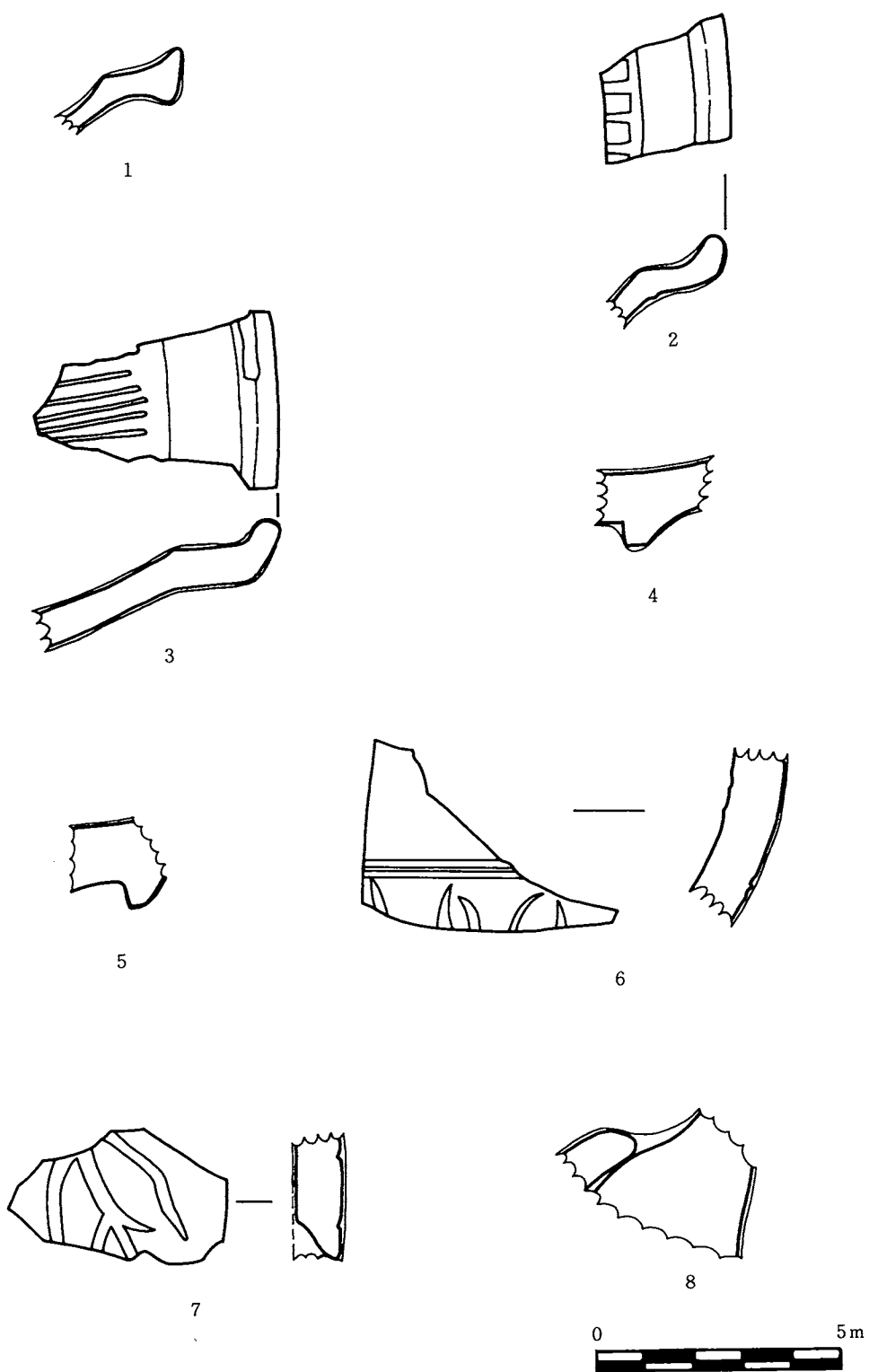
8 は酒会壺の落とし底の資料で、釉調は外面黄緑色、内面灰緑色を呈し、内外面とも比較的厚く施釉される。素地は淡灰白色の微粒である。第Ⅲ区 No. 7 グリット I 層の出土

2. 白 磁

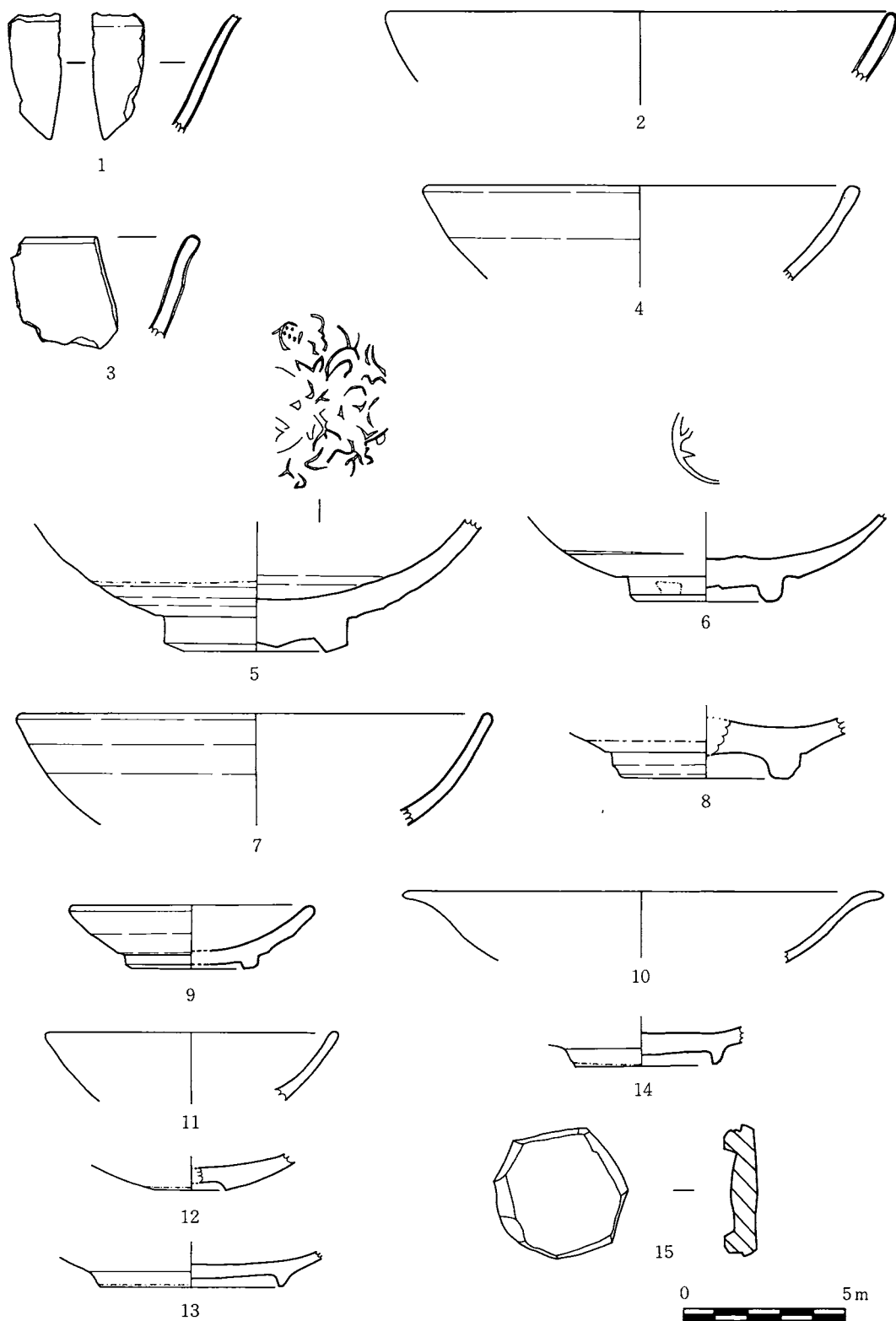
白磁は碗と皿の 2 器種が得られた。また、小皿底部の転用品である遊具も 1 点検出されている。

碗

碗は第 16 図 1～8 に示す 8 点が確認できた。その内訳は口縁部 5 点、底部 3 点である。1 は口縁端に釉の施されない口禿の碗で、口縁部が僅かに外反する器形である。2 は器厚が比較的厚く、口縁部の内湾するもので、ピロースクタイプ（註 1）と呼ばれる資料である。3 は口縁上部で僅かに凹み、外反する器形で、端部は丸く仕上げられる。5 は口縁部の直口する浅い碗で、透明な朱色釉が薄く施釉される。4 は内底に印花文を施すが、施文が浅く、失透釉のため不明瞭である。高台内ぐりは浅く雑に削り出される。7 は内底に円形のスタンプが施されるが 2/3 程欠くため詳細は不明。6 は淡いオリーブ釉のかかる直口口縁の碗で、内外面にかなり細



第15図 青磁盤1～5、壺6～9



第16図 白磁、碗1～8、皿9～14、遊具15

かい慣入を伴う。8は浅碗の底部で、内底は若干盛り上がる。内底は施釉後、拭きとり露胎にしている。

註1.「掘り出された沖縄の歴史」沖縄県教育委員会 1982年

第5表 白磁碗観察表

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	口径 器高 高台径	素地	施釉	釉色	慣入	文様	備考
1	口禿皿		白色微粒子	口縁端は露胎	淡青白色	なし		第Ⅲ区6dGI層
2	内湾口縁	15.8	〃	内外面ともやや薄く施釉	灰白色	〃		ビロースクタイプ 第Ⅲ区14G表土
3	外反口縁		淡灰白微粒子	〃	〃	〃		第Ⅰ区2GII層
4	直口口縁	15.8	淡黄色のやや粗粒子	〃 内面上部に釉垂れがみられる	米色	内外面に極めて細い慣入		第Ⅲ区6G Pit11
5		5.6	淡灰白色微粒子	外面は腰部から外底まで露胎 釉は薄く、失透釉である	淡灰色	なし	内底に印花文	印花文の外側に浅い凹線が認められる。 第Ⅲ区表採
6		4.8	淡黄白色微粒子	内底は施釉後拭きとられる。 畳付と外底は露胎	淡緑色の透明釉	内面は細かく、外底はやや荒い慣入	内底にスタンプ	第Ⅱ区3GII層
7	直口口縁	14.8	黄白色微粒子	内外面とも薄く施釉される	淡オリーブ色	内外面に極めて細い慣入		第Ⅲ区6G Pit10
8		5.4	白色微粒子	内底は施釉後拭きとられる。 高台際から外底は露胎	淡黄白色	〃		外底の削り出しは雑 第Ⅴ区1GII層

注: G=グリット

皿

皿と判別できたものは第16図9～14に示した6点である。9は口径7.5センチの小型皿で、器形的には志慶真門郭出土の皿分類Ⅵの扶入高台皿と類以する。畳付は研磨がなされ、滑面を呈する。11は薄手の外反口縁皿で、口径は15.0センチをはかる。14は直口口縁皿で、口縁端部が微弱な肥厚をなすものである。10は碁笥底皿で、畳付は露胎にされる。12は薄手の外反口縁皿の底部で、露胎の畳付に砂粒が付着している。外底の釉面には小孔が認められる。13は高台の造りが12と類以するもので、薄い失透釉がかかる。

第6表 白磁皿観察表

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	口径 器高 高台径	素地	施釉	釉色	慣入	文様	備考
1		7.5 2.0 4.2	白色微粒子	内底は施釉後拭きとられる 畳付と外底は露胎	淡黄白色	内外面に細かい慣入		畳付は研磨される 第Ⅱ区6GC II層
2	外反口縁	15.0	〃	薄い失透釉	淡灰白色	なし		薄手の製品である 第Ⅱ区6Gb 2層

3	直口口 縁	9.0	白色微粒子	薄い失透釉	淡灰白色	な し		第Ⅱ区10 G P i t 7
4	碁笥底 皿	2.0	〃	〃 畳付は露胎	〃	〃		第Ⅱ区1 GⅢ層 畳付に砂粒付着
5		5.6	〃	薄い失透釉 畳付は露胎	乳白色	〃		第Ⅱ区8 GⅠ層
6		4.6	白色のやや 粗粒	〃	淡黄白色	内外面に細 かい慣入		第Ⅱ区6 G P i t 19

注 G－グリット

遊具

第16図15に示したもので、白磁小皿の底部を高台脇から打ち欠いて円盤状に成形される。高台および外底は露胎で、内面に黄白色の透明釉が施され、慣入を伴う。素地は淡黄白色粗粒でやや生焼けである。第Ⅲ区No.6 グリット Pit 4 の出土。

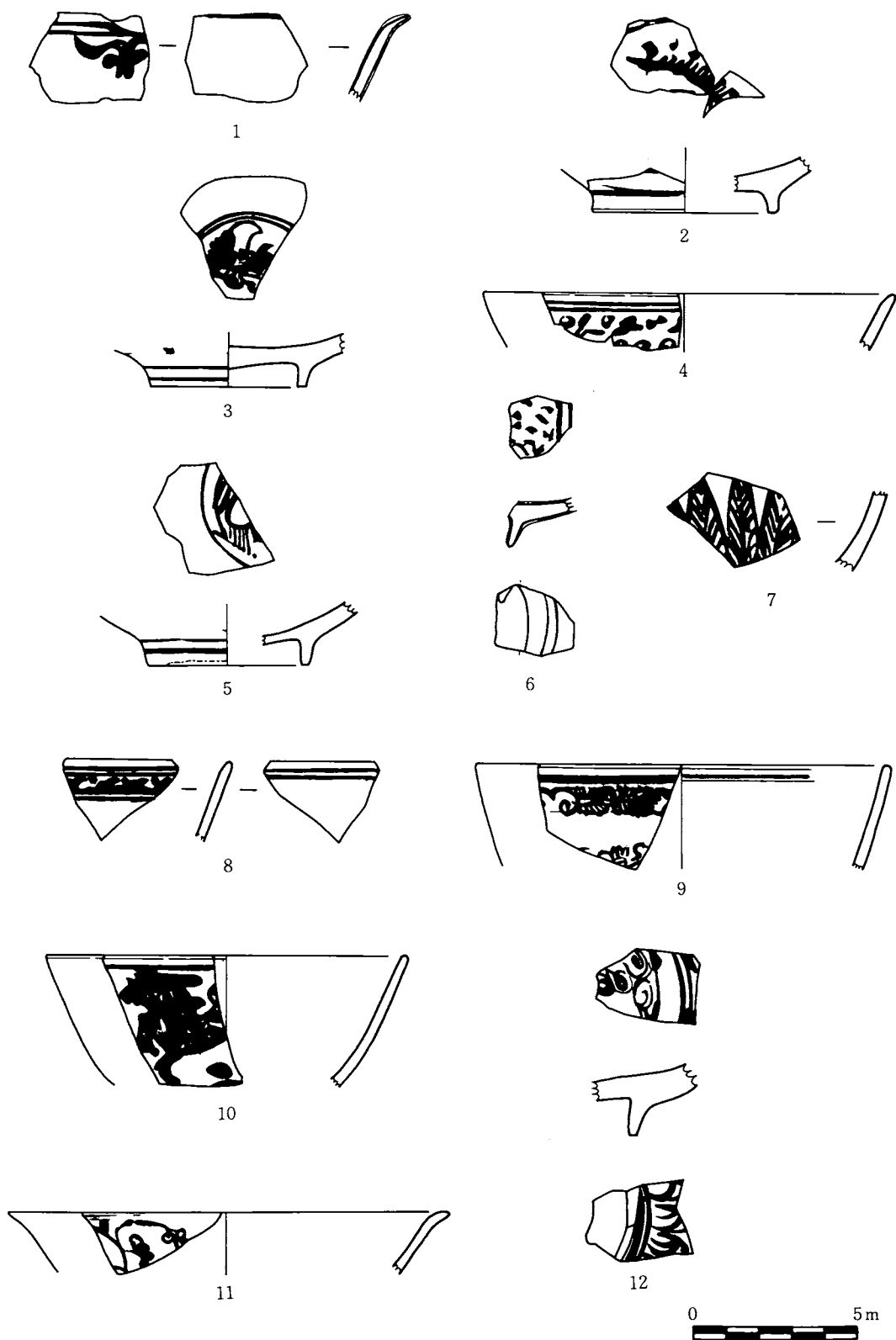
3. 染 付

今回の調査で得られた染付はすべて明代の資料で、碗・皿・杯・壺・瓶の5器種が認められた。復元して全形の窮えるものない。

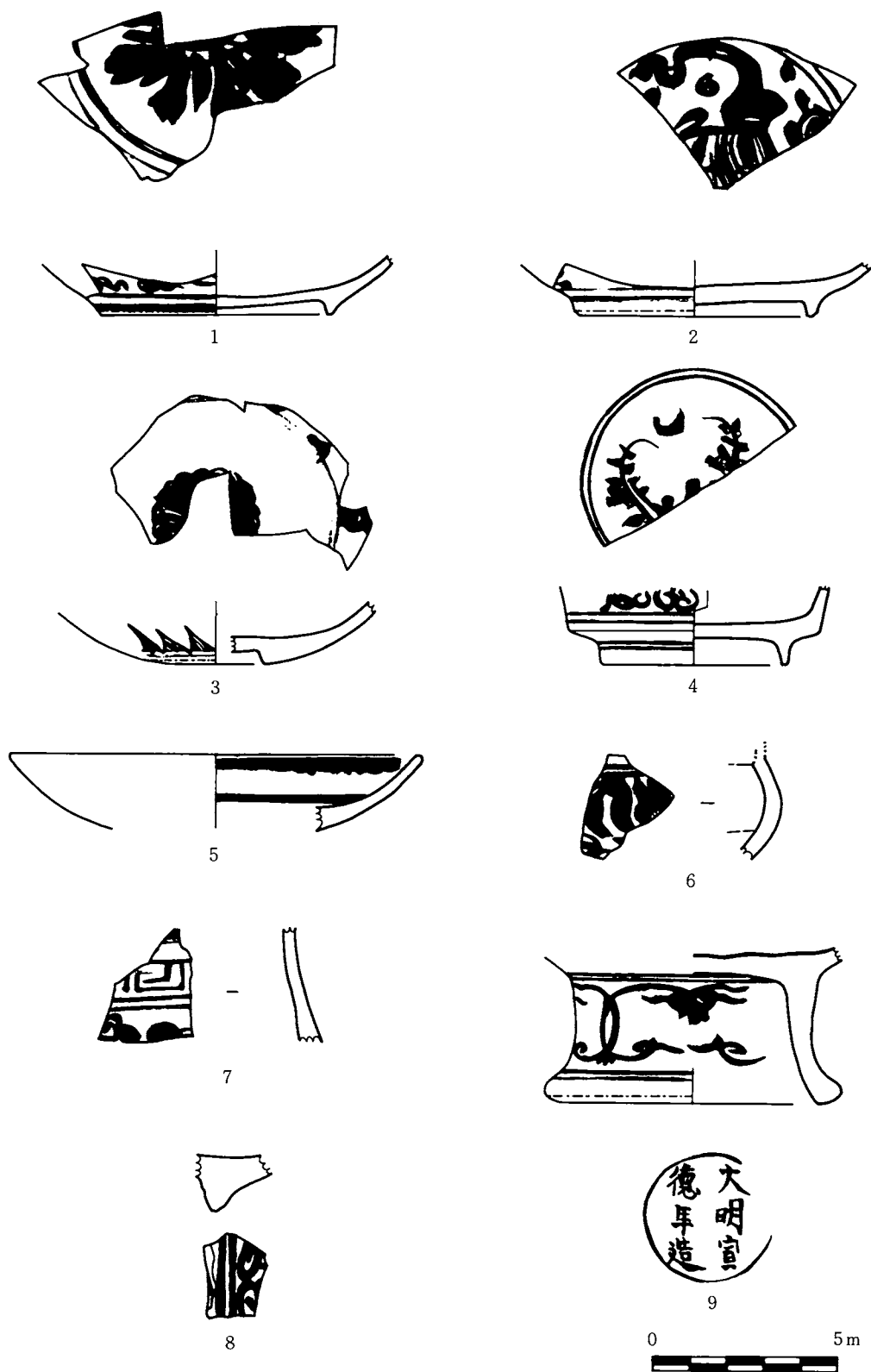
以下、前記の順序で略述する。

碗

碗は口縁部6点、胴部1点、底部5点を第17図に示した。1は口縁端が外反し、鐔状をなすもので、外器面に唐草文が施される。2は高台が若干外開きに造られるもので、内底部に観月図を施文している。3は内底部に観月図とその周囲に2本の界線を廻らすもので、畳付は平坦に成形される。6は器外面に三葉状文と小円状の文様を交互に施す直口口縁碗である。5と7は蓮子碗の底部と考えられるもので、5は内底部に蓮花文と界線が施される。7は内底部に鈎皮状文と界線を施文している。4は芭蕉文の施されるもので、完形において口縁部に波濤文を描く蓮子碗の胴部になると思われる。8は口縁部に波濤文帯を有するもので、波濤文の上下に各2本の界線が廻る。9と10は腰折れの直口口縁碗と考えられ、9は器外面口縁部に波濤文、胴部にアラベスクを施文する。10は器外面に飛馬文を施す。11は1と同じ鐔状の口縁をなすもので、器外面胴部に唐草文、口縁端内面に四方擧文が施文される。12は高台が比較的高くされ内底部に唐草状の文様、外器面腰部に如意頭文を施す。



第17図 染付碗



第18図 染付皿1~5、小壺 6、瓶7~9

第7表 染付碗観察表

挿図番号 図版番号	口 径 器 高 高台径	呉須(藍色) の 発 色	施 釉	釉 調	文 様 構 成								備 考
					外 面				内 面				
					口 縁 部	胴 部	腰 部	外 底 部	口 縁 部	胴 部	内 底 部		
1	— — —	全般的に鈍い	内外面とも薄く施釉されるが口縁端は厚目に施釉	青白色	界線	唐草文	—	—	界線	—	—	第Ⅲ区 6 G I 層	
2	— — 5.8	やや鈍く、部分的に黒ずむ	高台内と畳付は露胎、内底は極めて薄く施釉	〃	—	?	界線	大半欠失	—	—	観月図	第Ⅲ区 6 b G I 層	
3	— — 4.8	部分的に黒ずむが、全般的に淡い	畳付は露胎	〃	—	—	〃	なし	—	—	〃	第Ⅲ区 6 G P i t 13	
4	12.6 — —	界線は淡く文様はやや鈍い発色	薄い施釉	淡青白色	界線	小三円葉状文と	—	—	界線	—	—	第Ⅲ区 6 b G I 層	
5	— — 4.8	淡い	畳付は露胎、高台内と外底は極めて薄く施釉	〃	—	—	界線	なし	—	—	蓮花文	第Ⅱ区 3 G II 層	
6	— — —	やや鈍く、淡い発色	全面に施釉される	〃	—	—	〃	—	—	—	皮界線文と豹	第Ⅲ区 6 d G I 層	
7	— — —	やや鈍く、一部黒紫色を呈す	内面は外面に比して薄く施釉される	淡灰白色	—	芭蕉文	—	—	—	なし	—	第Ⅲ区 9 G I 層	
8	— — —	文様の発色はやや鈍く界線は淡い	薄い施釉	白色	界線	波濤線文上に	—	—	界線	〃	—	第Ⅱ区 3 G P i t 6	
9	12.8 — —	全体的に鈍い発色で、一部釉上に浮遊部分的に黒ずむ	〃	淡青白色	〃	〃	アラベスク	—	〃	なし	—	第Ⅲ区 6 d G II 層	
10	11.2 — —	比較的鮮明に発色	〃	〃	〃	飛馬文	—	—	〃	—	—	第Ⅲ区 8 G I 層	
11	14.0	淡い	〃	〃	〃	唐草文	—	—	四方拳文	なし	—	第Ⅲ区 10 G I 層	
12	— — —	内面は淡く外面は比較的鮮明である	〃	〃	—	—	と如意線頭文	—	—	—	状界の線文と様唐草	第Ⅲ区 7 G I 層	

注 G—グリット

皿

染付皿は4点を第18図1～3、5に示した。

1は内底部に蓮花文と2本の界線が廻るものである。器外面は高台に2本の界線を施し、腰部に宝相華唐草文を施文するものであろう。呉須はやや鮮明に発色する。畳付は露胎で、高台の内外に砂粒の付着がみられる。釉調は内外面とも淡青色を呈し、素地は白色微粒子である。本品は第Ⅲ区No.8グリットI層とNo.13グリットII層の接合資料である。

2は内底部に玉取獅子を描くもので、高台径は6.6センチをはかる。器外面の腰部には文様

の端部と界線がみられる。呉須の発色は全体的に鈍い。畳付は露胎で、淡青白色釉が施釉される。素地は白色微粒子である。第Ⅲ区 No.7 グリットⅡ層出土。

3は碁笥底の皿で、外面腰部の界線上に芭蕉文が施される。内面は内底部に菊花文、胴部に界線と花文が施される。呉須の発色は鈍く、内外面の界線は淡い。腰部下位は露胎で、青白色釉が施釉される。本品は志慶真門郭出土の皿と文様が類以する。第Ⅱ区 No.6 C グリットⅡ層。

5は口径が13.2センチの出土 直口口縁の皿で、志慶真門郭出土の皿分類のⅢに属するものである。内面の口縁部に1本、胴部に2本の界線が施される。釉調は淡青白色を呈し、素地は白色微粒子で堅固。第Ⅲ区 No.6 グリット Pit 11。

杯

第18図4に示すもので、高台径 5.0センチの腰折れ杯である。文様は内底部に梅月文と界線を施し、外面胴部に如意頭文と界線を描き、高台にも界線を施している。高台内外途中と畳付は露胎で、灰白色釉が施される。素地は白色微粒子で、内底部に砂粒の付着がみられる。第Ⅱ区 No.2 グリットⅠ層の出土。

小壺

第18図6に示すもので、外器面に施される文様のモチーフは釉表面の風化のため判然としないう。淡灰白色の釉調を呈し、素地は白色微粒子で、堅緻である。

瓶

第18図7は頸部資料で、雷文帯を施す。呉須は比較的濃く発色しているが、黄濁した釉に被われ、不明瞭である。素地は白色微粒子である。第Ⅱ区 No.4 グリットⅠ層出土。

8は外器面に如意頭文の施される底部である。内底面の施釉は粗く、畳付とその周辺は燈褐色を呈す。釉表面は20と同じく、黄濁した釉調を呈す。素地は白色粗粒で、堅微である。

第Ⅲ区 No.10 グリットⅠ層出土

9は外底面に「大明宣徳年造」の銘が記される脚台で、釉、施文法等から欺名の可能性がある。外器面にアラベスクと、その上下に各2本の界線を施している。畳付は露胎にされ、灰白色の釉を施す。内外面に慣入がみられる。素地は白色の粗粒である。第Ⅲ区 No.9 グリットⅠ層出土。

4. 褐釉陶器 (第19図1～6・12)

1は器壁が厚く、外反するものである。口径は12.0センチをはかる。器面には黄褐色釉が施されるが、大部分は剥離している。素地は青灰色のやや粗粒で、練りが悪く胎土中に気泡が認

められる。第Ⅲ区No.6 グリット Pit 14の出土。

2は口縁部が内傾し、端部で三角形に肥厚するものである。暗褐色釉を施すが、口唇部は蓋による磨滅のため露胎となっている。また、口縁内面も蓋による衝激で、器面が細かく剥落している。外器面は細かい小孔がみられる。素地は灰色の粗粒である。推算口径10.0センチ。第Ⅲ区No.6 グリット Pit 10の出土。

3は口径24.4センチの比較的大型の壺で、口縁部の断面が方形をなすものである。素地は灰褐色粗粒で、白色砂粒の混入が認められる。黄褐色釉が薄く施釉されるが、内面には露胎のところもある。第Ⅲ区No.7 グリット I 層の出土。

4は口縁部を玉縁状につくるもので、黒褐色釉を薄く施される。素地は茶褐色を呈し、白色微砂粒を混入している。第Ⅱ区No.3 区グリット II 層の出土。

5は口縁部を欠失する小壺で、器外面に灰色釉を腰部まで施釉している。底部は僅かに揚げ底にされ、内器面には轆轤成形痕を残している。素地は青灰色の粗粒で、白色砂粒を多量混入する。第Ⅱ区No.3 グリット II 層の出土。

6は袋物の胴部片で、器外面に唐草状の文様が施される。内面に釉は施されず、外面に淡いオリーブ色の釉がかかるが、大部分は剥落している。また、釉は細かい慣入を伴う。素地は黄白色の半磁胎である。第Ⅴ区No.2 グリット I 層の出土。

12は黄褐色釉を薄く施釉するもので、内面には轆轤成形痕が認められる。素地は淡灰褐色の粗粒子である。第Ⅲ区No.8 グリット II 層の出土。

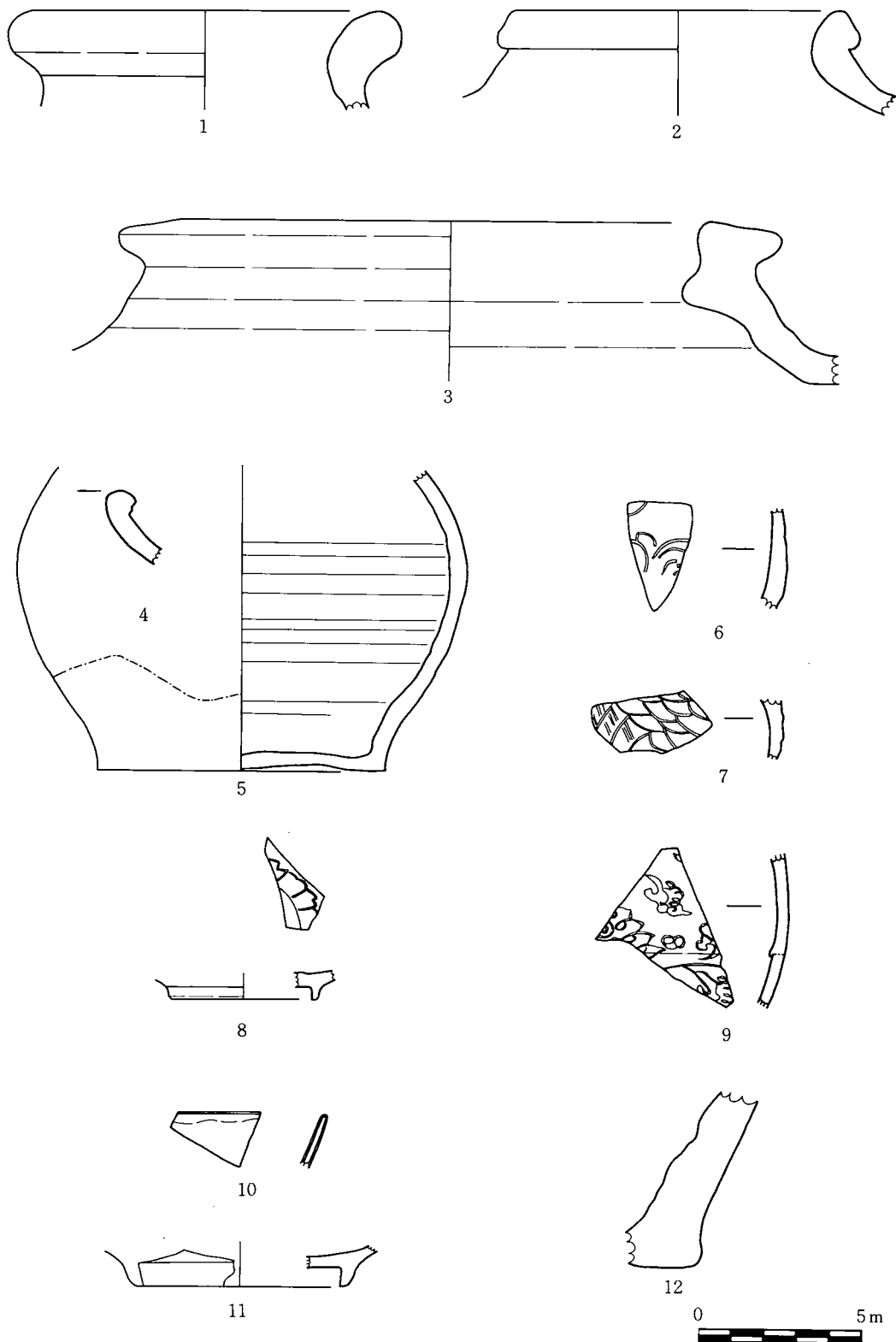
5. 三 彩（第19図7・8）

7は小片のため判然としないが、水鳥あるいは魚形の水指と思われる。緑および黄色釉が施されるが、風化が著しく剥落している。素地は黄濁の半磁胎である。第Ⅲ区No.10グリット I 層の出土。

8は内底に淡い緑色釉のかかるもので、緑釉あるいは三彩と考えられるが判然としない。内底部は僅かに凸状をなし、その周囲に花文を施す。畳付と高台内は露胎にされ、乳白色釉が施釉される。素地は白色微粒子で、堅く焼き締められる。高台径は 5.6センチ。第Ⅲ区No.6a グリット I 層の出土。

6. 緑 釉（第19図9）

器外面に唐草文の施される瓶の胴部片で、器体は胴継ぎによる成形技法でなされ、内面に継ぎ目を残す。釉は薄く外面に施釉される。素地は白濁の半磁胎で、やや生焼きである。第Ⅲ区No.6a グリット I 層の出土。



第19図 褐釉(1~6・12)、三彩(7・8)、緑釉(9)、瑠璃釉(10)、翡翠釉(11)

7. 瑠璃釉

第19図10に示した1点の出土で、碗と思われる。釉調は内面と外面上部に白磁釉、外面胴部に瑠璃釉が施釉される。素地は白色微粒子で、堅く焼き占められる。第Ⅲ区No.6 d グリット II 層の出土。

8. 翡翠釉

第19図11に示したもので、皿の底部と考えられる。畳付と外底内は露胎にされ、内外面に翡翠釉を施す。内底部の釉はほとんど剥離している。素地は白色微粒子で堅い陶胎のものである。

9. 備前焼播鉢

第21図1・2に示した2点で、胴部資料である。1は内面に11本の櫛描きがみられるものである。櫛描きは6本単位の櫛で施されたものである。素地は粗粒子で、還元焼成され、灰色を呈する。第Ⅲ区No.6 d グリット II 層の出土。

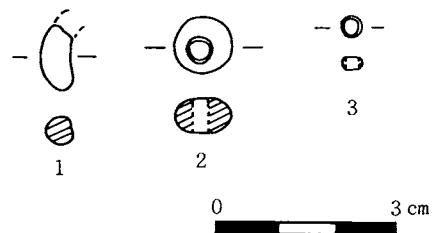
2は内面に7本の櫛描きがみられるが、小破のため何本単位の櫛かは不明である。素地は粗粒で、石英微砂粒と石灰質砂粒が見受けられる。器色は外面暗褐色、内面燈褐色を呈する。第Ⅲ区No.6 a グリット I 層の出土。

10. 土器

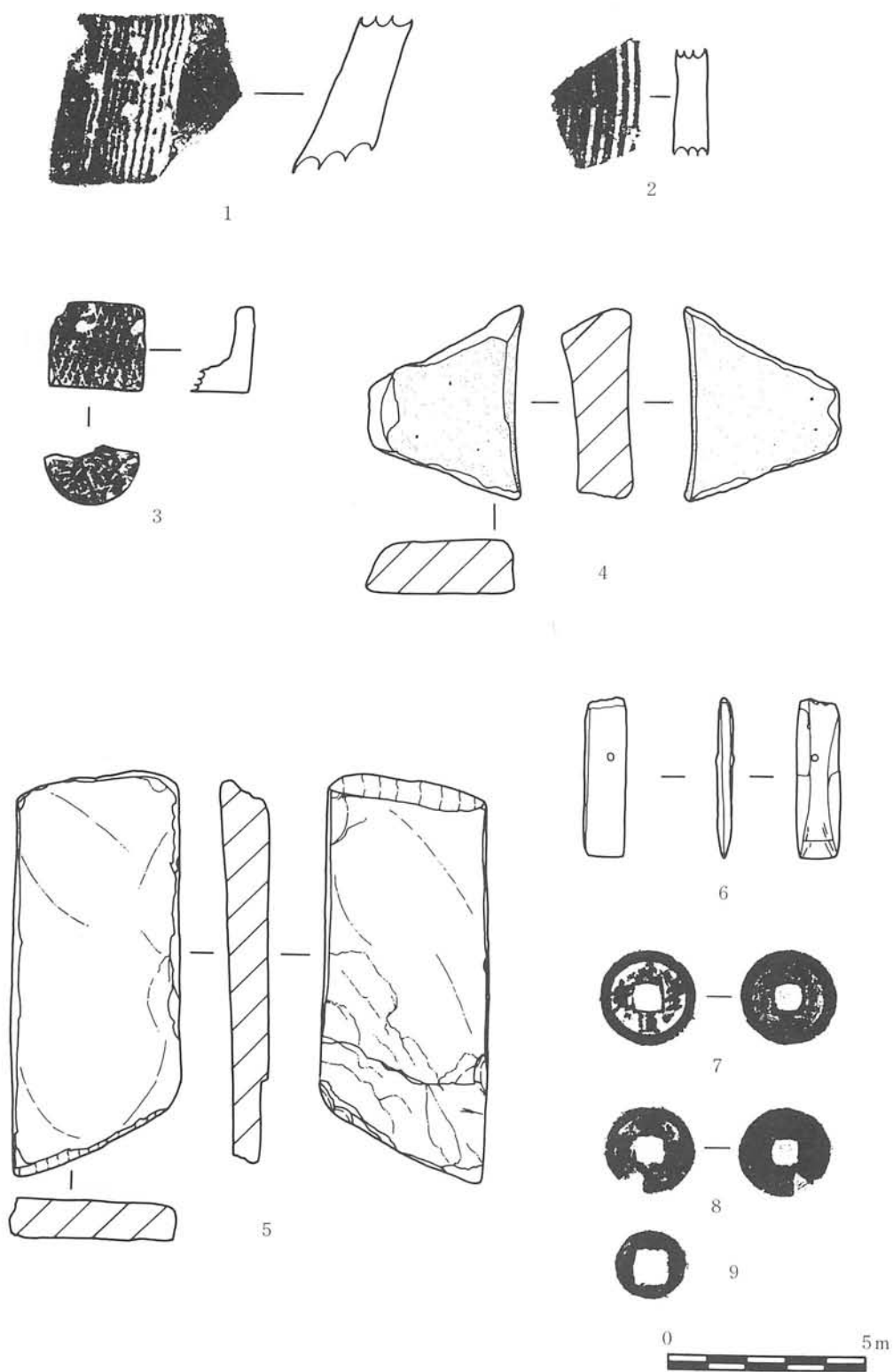
土器片は総数35点の出土をみたが、すべて胴部資料であった。志慶真門郭出土の土器分類に従えばⅠ類（千枚岩の破片を多量混入し、素地は泥質の微粒子である）33点、Ⅱ類（石英、角閃石、赤色の鉱物を混入し、素地はⅠ類より密でねん性が強い）2点である。層位的にみてもⅡ層出土のものは24点であった。

11. ガラス製品

ガラス製品は第20図に示す3点を得られた。1は頭部を欠く勾玉で、緑色のソーダガラスでつくられる。器面の風化が著しく、全面パチナに被われる。第Ⅱ区No.3 グリット II 層の出土。2・3は小玉で、2は白色、3は緑色の巻きガラスである。2は重量 0.6グラム、第Ⅰ区No.1 グリット I 層の出土。2は 0.1グラム以下の標品で、第Ⅲ区No.6 d グリット II 層の出土。



第20図 ガラス製品



第21図 備前焼播鉢1・2、石製品(キセルの焦首3、砥石4・5)、骨製品6、貨銭7~9

12. 石製品

キセルの雁首

第21図3に示したもので、外面と外底面に文様に文様を施している。外面は方向の異なる斜沈線を格子目状に施し、外底面は有軸の羽状文を十字状に施文している。内面は丁寧に調整され、滑面を呈するが、内底部は雑にされる。第Ⅲ区6aグリットI層出土。

砥石

砥石は第21図4・5の2点が得られた。4は琉球石灰岩を用いたもので、表裏面とも砥面として使用され、曲面を呈する。第Ⅲ区No.10グリットI層出土。5は平面形が長方形をなすもので、貢岩製である。表裏面とも使用されるが、裏面は表面に比して滑らかな面である。第Ⅱ区3グリットPit 6の出土。

13. 骨製品

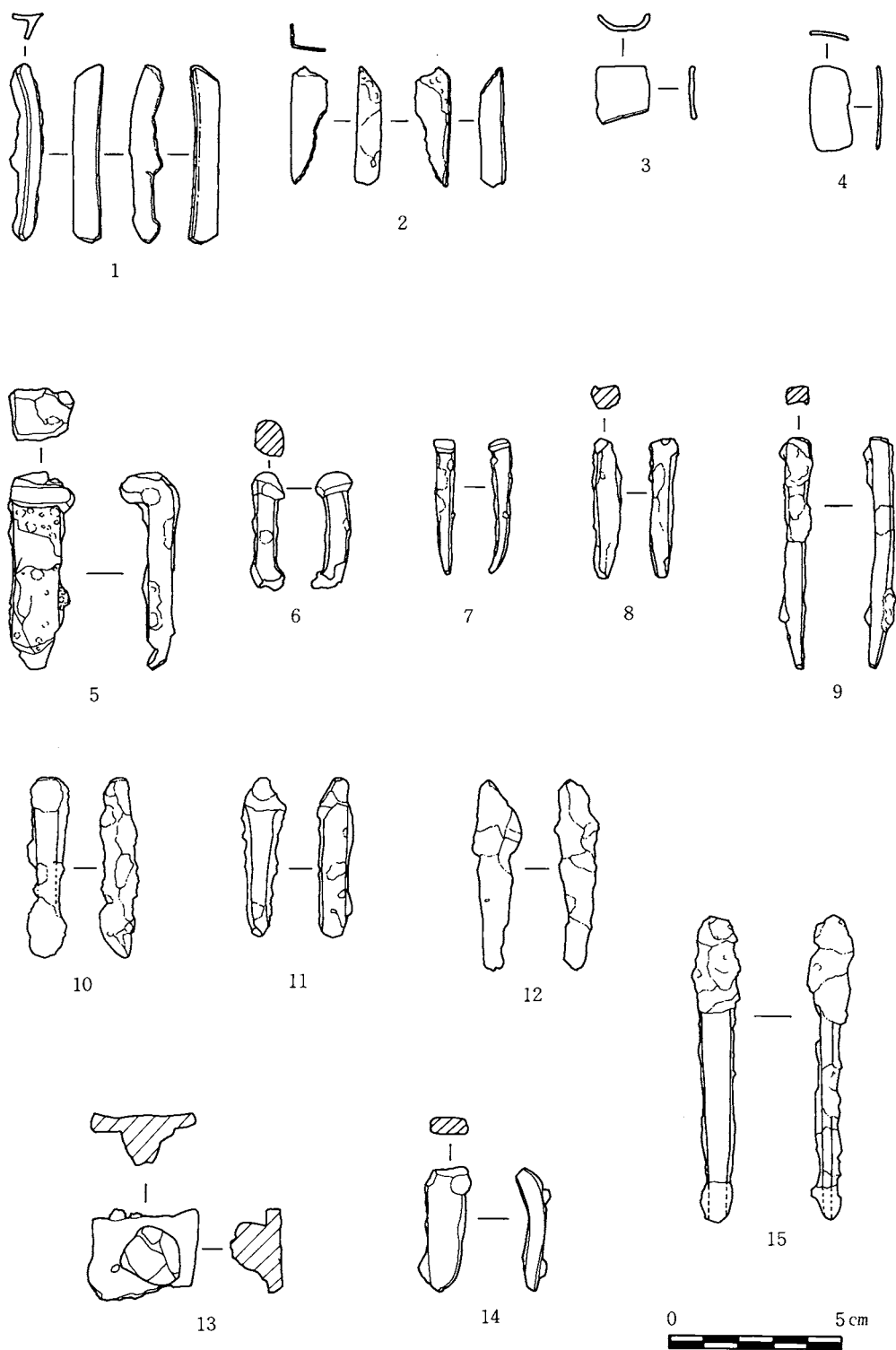
第21図6に示したもので、頭部を僅かに欠く筧状の製品である。刃部は両面より研ぎだされるが、片刃的な刃部となっている。表裏面および両側面は研磨されるが、徹底していない。本品の中間部には直径2ミリ、長さ5ミリの銚を貫通させている。現存長4.1センチ、幅1.1センチ、厚さ4ミリである。素材については不明である。第Ⅱ区1グリットPit 1の出土。

14. 貨銭

第21図7・8・9に示した3点が得られた。7は1078年に初鑄造された元豊通宝で、完形品である。第Ⅱ区No.1グリットPit 6の出土。8は洪武通宝と思われるが、サビのため判然としない。第Ⅲ区No.6aグリットPit 10の出土。9は無文銭で、第Ⅲ区No.11グリットI層の出土。

15. 銅製品

第22図1～4に示す4点が得られた。4点とも小破片のため、詳細については不明である。1は断面が高台状をなし、平面形が弧を描くものである。第Ⅲ区No.6dグリットII層の出土。2は角のあるもので、第Ⅲ区No.7グリットII層の出土。3は横断面が弧状を呈するものである。第Ⅱ区No.6dグリットII層の出土。4は方形の破片で、資料の右側に沈線が認められる。第Ⅴ区No.2グリットI層の出土。



第22図 銅製品(1~4)、鉄製品(鉄釘5~12、溜状製品13、篋状製品14・15)

16. 鉄製品

鉄製品は後代のものも含め60点余の出土があった。グスク時代に属すると思われるもので、器種の判別できたのは鉄釘だけであった。また、鉄滓が4点得られた。

鉄釘

第22図1～12に示すもので、すべて角釘であった。完形品5と6の2点で、他の資料は頭部あるいは先端部を欠いている。10・11・12の3点は横断面が四角状をなすものであるが、錆の付着が著しく、鉄釘として判然としないものである。

溜状製品

第22図13に示すもので、厚さ約5ミリの鉄板に溜状の凸起が付される。第Ⅳ区No.6グリットⅡ層出土。

篋状製品

身の厚さより幅の大きなもので、第22図14と15に示した。14は小型のもので、湾曲している。第Ⅲ区No.6グリットPitの出土。15は身の長さ9センチのもので、頭部は厚く、身は先端部に向かって厚さを感じている。第Ⅱ区No.1グリットPit1の出土。

鉄滓（PL.58）

今回の調査で検出されたのは4点であるが、化学分析を行なってなく、そのため、鍛冶作業あるいは製練作業のいずれから流出して出来た滓なのかは不明である。1は第Ⅲ区No.16グリットⅠ層出土。2は第Ⅲ区No.6bⅠ層出土。3は第Ⅲ区No.11グリットⅠ層出土。4は第Ⅲ区No.13Ⅱ層出土。

17. 食料残滓

貝殻

貝殻は第8表に示すとおり、10科13種の海産貝が得られた。31グリット中の18グリットで検出されたが、散発的な出土状況であった。また、Ⅰ層からの出土が多く、黒褐色土層中からの出土は僅かに6点であった。出土量の少ないことから、他の場所に捨てたものと考えられる。

第 8 表 貝種別出土表

貝種 No.	発掘地区 貝 種 層		Ⅰ 区			Ⅱ 区			Ⅲ 区						Ⅳ 区			Ⅴ 区		合 計			
			1	2	4	2	3	4	3	6c	7	8	10	12	2	3	4	1	2				
			Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ		Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ			Ⅱ	Ⅰ
1	ソデガイ科	マガキガイ	1	1	5			4									1	1	2	1	16	Ac	
2		ムカシタモト				1															1	a	
3	タカラガイ科	ハナマルユキ		1					1												2	Cde	
4	アッキガイ科	ツノテツレイシ												1 (1)	1						2 (1)	Ad	
5	イトマキボラ科	イトマキボラ												1 (1)							1 (1)	Be	
6	シャコガイ科	不 明											1	1 (1)		1				1	4 (1)		
7	マルステレガイ科	ヌノメガイ								1											1	Da	
8		アラスジケマンガイ		1				1													2	Da	
9	オニコブシ科	ユオニコブシ	1												1			1			3	De	
10	リュウテン科	ヤコウガイのふた													1		1				2	Cf	
11		チョウセンサザエ	1				1	3				1	1								7	Cf	
12	オキニシ科	シロミオキニシ							1												1	Ae	
13		巻 貝 不 明	2							1					1 (1)						4 (1)		
合 計			5	3	5	1	1	8	2	1	1	1	1	1	4 (4)	3	1	1	2	1	3	1	46

注記 棲息地の記号は下記のとおりである。(棲息地については主に、白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』1977年新星図書を参考にして他から補給した。

- | | | |
|----------|--------|---------|
| A. 潮間帯 | a. 砂底 | f. サンゴ礁 |
| B. 潮間帯付近 | b. 細砂底 | g. 泥底 |
| C. 潮間帯下 | c. 砂礫底 | |
| D. 浅海 | d. 岩礫底 | |
| E. 淡水・河川 | e. 岩礁 | |

獣骨

獣骨の出土量もそれほど多くなく、ウシあるいはウマ等の大型獣の骨が多い。他にイノシシ海獣骨等が認められた。

魚骨

魚骨は7点の出土で、ハリセンボン、ブダイ、ベラ科、タイ科の4種が認められた。

第Ⅵ章 ま と め

今回の調査は、今帰仁城跡の史跡指定地外に所在する石垣、方形石積遺構等の構築物の確認と、集落跡の検出を行なった。その結果、前章までに既に記述したような成果が得られた。

昭和59年度に実施した第1次発掘調査では、第Ⅰ区を除く4地区でPit状遺構が検出された。第Ⅱ区No.3・4グリットと、第Ⅲ区No.6・8・9・10・13グリットで比較的多くみられ、この2区が集落跡である蓋然性は強いと考えられる。また、前記7グリットと第Ⅴ区No.1グリットの遺構検出層である黄褐色土層は、その層中に褐色土を混在しており、造成層と考えられた。第Ⅱ区のNo.7グリットでは、石敷遺構が検出されたが、性格等を究明するにはいたらなかった。

遺物は青磁、白磁、染付、褐釉陶器等の中国製陶磁器、備前焼播鉢、土器、ガラス製品、石製品、骨製品、貨銭、金属（鉄・銅）製品、鉄滓等の人工遺物と、貝、獣魚骨等の少量の自然遺物が得られた。検出された陶磁器類は、13世紀後半から16世紀にかけてのものであるが、古式のもは表土層からの出土で、遺物包含層あるいはPit内より得られたのは14世紀後半から16世紀のものであった。

青磁は碗・杯・皿・盤・壺の5器種が認められ、13世紀後半の朱光青磁をはじめ、15後半から16世紀前半の細線刻蓮弁文碗まで得られた。白磁は碗・皿の2器種と、皿底部の転用品である円盤状の遊具が得られた。14世紀前半といわれる口禿碗とピロースクタイプの碗が検出されたが、表土層からの出土であった。白磁の多くは14世紀後半から16世紀に属する。染付は明代の資料が得られ、碗・皿・杯・小壺・瓶等の16世紀のものである。その他の中国陶磁器として、褐釉陶器・緑釉・三彩・五彩・翡翠釉・瑠璃釉等が出土している。

中国以外の輸入陶磁器として、備前焼播鉢の胴部片が2点得られた。

土器は35点と少なく、志慶真土器分類のⅠ類に属するものが33点、Ⅱ類は2点であった。黒褐色土層出土のものが24点と多かった。

ガラス製品は勾玉の頭部欠損品1点、小玉2点の出土があった。石製品は文様の施されるキセルの雁首と砥石が得られた。骨製品は刃部を有する長方形の筥状製品で、身の中央部に銚が貫通している。貨銭は3点の出土があったが、銘の記されるものは2点で、判読できたのは元豊通宝の1点であった。銅製品は小破片のため、用途不明の4点得られた。鉄製品は比較的多く検出されたが、用途の判別できたのは鉄釘だけであった。また、鉄滓が第Ⅲ区のNo.6d、6bリグリット、第Ⅳ区No.4グリットで検出されており、鍛冶の存在が考えられる。

自然遺物は貝殻と獣魚骨が得られた。貝殻は10科13種が認められたが、量的に少なく、別の地点に捨てたのか、あるいは貝類に対する衣存度の低下の結果なのか、今回の調査では判明しなかった。また、獣魚骨の出土量も少なかった。本調査では、土洗浄を行なわず、炭化米・麦等の検出はなかった。

次に、城跡の周辺に所在する石積遺構は、東区で2基、西区で8基が確認され、また、東区の県道沿いには石垣、土留め石積み等が比較的良好な状態に残っていた。また、旧道の調査もあわせて行なった。

旧道は時代については不明であるが、総延長 300m残っている。城跡へ通ずることより、グスクが機能していた傾からのものと考えられる。道は2～4 m幅で、傾斜地には階段を設け、縁石を伴うものである。また、自然岩の平場を利用、平坦地では小礫を敷くなどの工夫が為される。道の両側には松が植栽され、景観をそえている。

石積遺構はこれまで「ミームングスク」や「シニグンニ」などが知られていたが、今回の調査で新たに4箇所の丘陵で計8基が確認された。遺構は共通していずれも丘陵頂上部に築かれ各遺構間で視認できる位置関係にある。

石垣および土留め遺構は、城跡北西から北側にかけての平地でみられ、第1次調査区の第Ⅱ・Ⅲ区と同じく、集落跡が想定される。

以上のことから、今帰仁城跡周辺には多くの関連すると考えられる遺構が存在していることから、適正な保存が講じられるよう関係機関の一層の努力が必要である。

圖 版



PL.1 第I区



PL.2 第II区



P L . 3 第Ⅲ区



P L . 4 第Ⅳ区



P L . 5 第Ⅲ区の代採作業状況



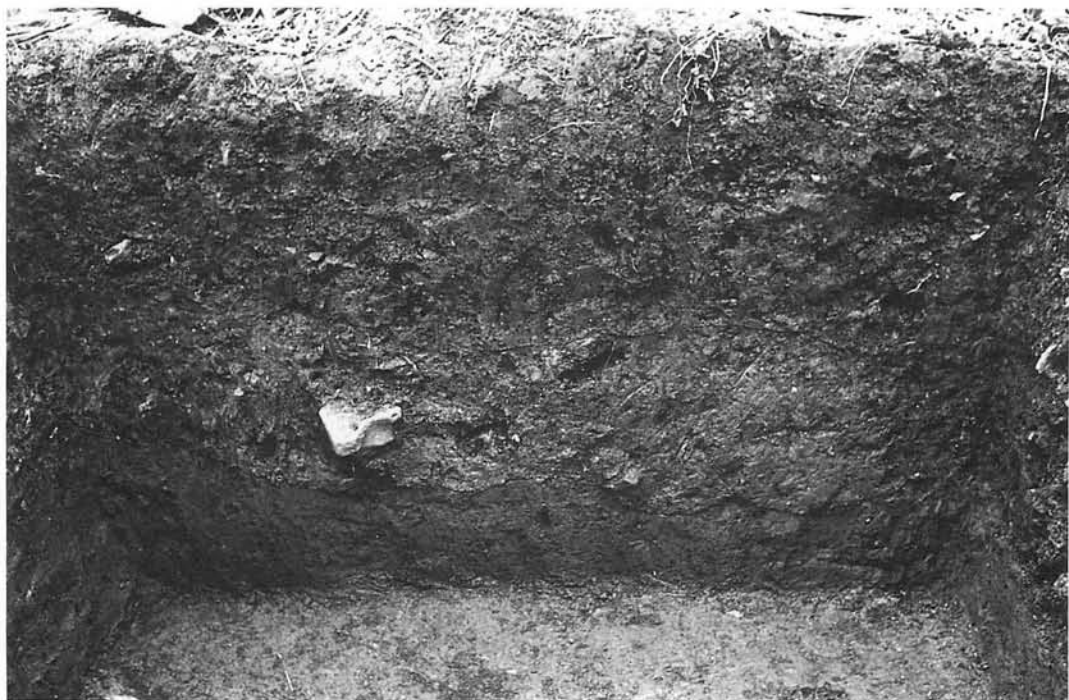
P L . 6 第1号石積遺構の代採作業状況



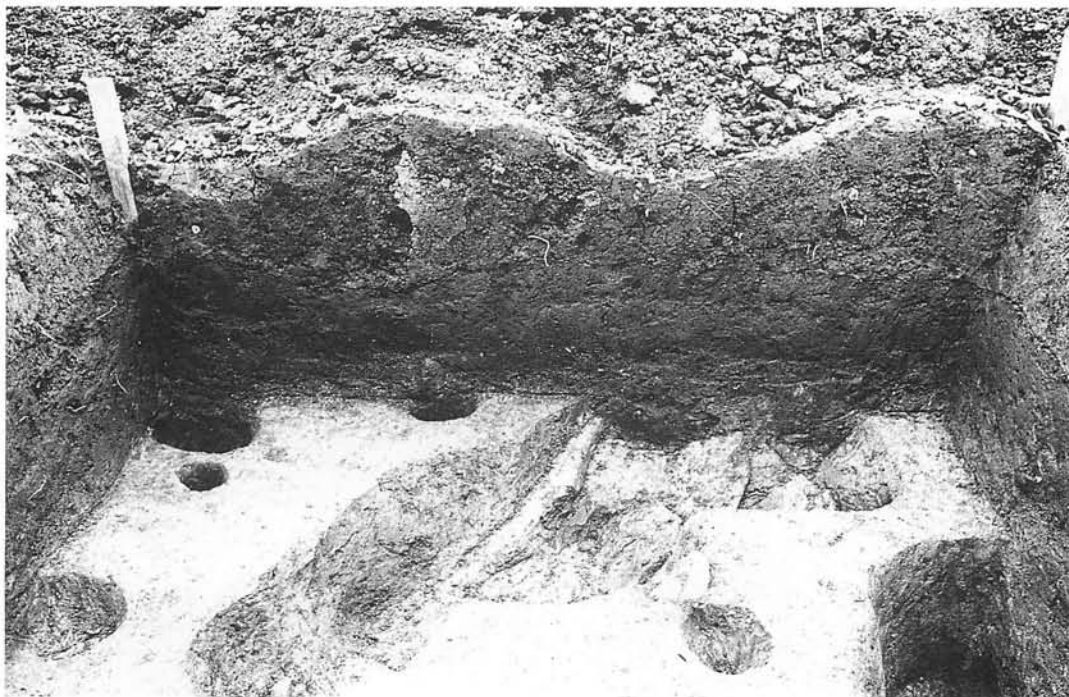
P L . 7 発掘調査状況



P L . 8 発掘調査状況



P L . 9 第Ⅰ区No.2 グリットの層序(南壁)



P L . 10 第Ⅱ区No.3 グリットの層序(北壁)



P L .11 第Ⅱ区No.4 グリットの層序(東壁)



P L .12 第Ⅲ区No.6 グリットの層序(東壁)



P L .13 第Ⅲ区No.7 グリットの層序(北壁)



P L .14 第Ⅲ区No.10グリットの層序(東壁)



P L . 15 第Ⅵ区No. 5 グリットの層序(南壁)



P L . 16 第Ⅴ区No. 2 グリットの層序(北壁)



P.L.17 第Ⅱ区No.3 グリットのPit状遺構検出状況



P.L.18 第Ⅱ区No.4 グリットのPit状遺構検出状況



P L .19 第Ⅲ区No.6 グリットのPit状遺構検出状況



P L .20 第Ⅲ区No.7 グリットの石敷遺構検出状況



PL.21 第Ⅲ区No.10グリットのPit状遺構検出状況



PL.22 第Ⅲ区No.14Pit状遺構検出状況



PL.23 第Ⅳ区No.5 グリットPit状遺構検出状況



PL.24 第Ⅴ区No.1 グリットのPit状遺構検出状況



P L . 25 東区 の 石垣 検出 状 況



P L . 26 旧 道 の 石 段 、 北 側 よ り



P L . 27 旧道の縁石、北側より



P L . 28 旧道・石敷の検出状況、南側より



PL.29 第1号石積遺構(ミームングスク)、西側より



PL.30 第1号石積遺構(ミームングスク)、北西側より



P L .31 第2号石積遺構(シニグンニ)、西側より



P L .32 第2号石積遺構(シニグンニ)、南側より



P L .33 第 3 号石積遺構、東側より



P L .34 第 4 号石積遺構 A、東側より



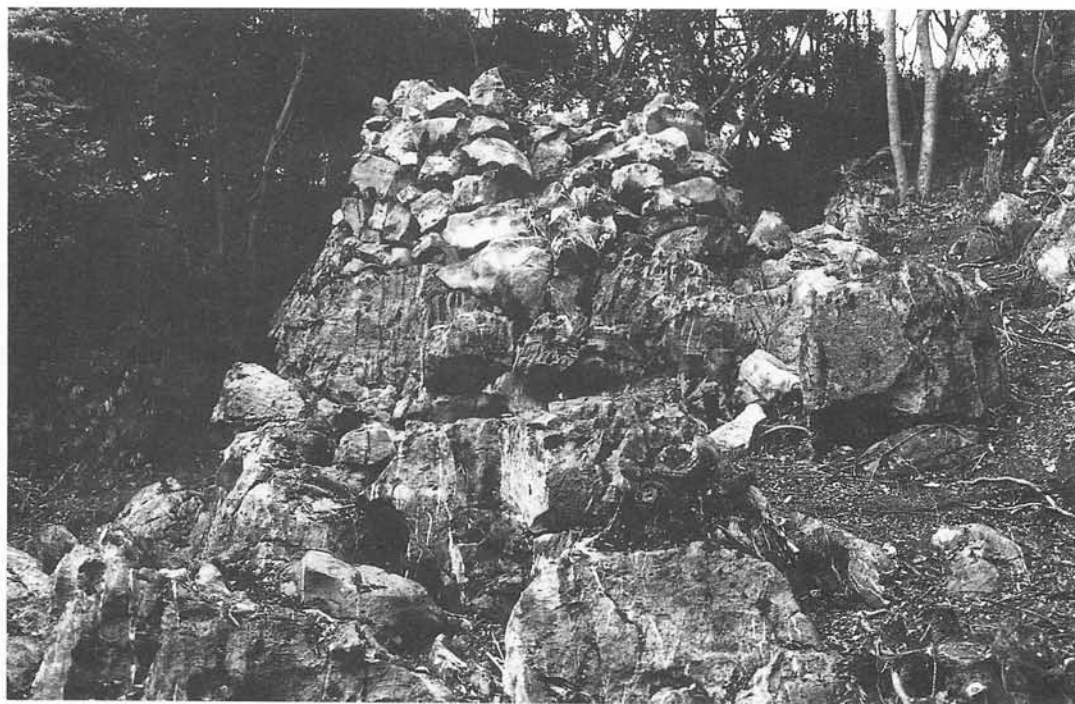
P L . 35 第 4 号石積遺構B、西側より



P L . 36 第 4 号石積遺構C、西側より



PL.37 第5号石積遺構(ターラグスク)、南側より



PL.38 第6号石積遺構(チンマーサ)A、南側より



PL.39 第6号石積遺構(チンマーサ)B、東側より



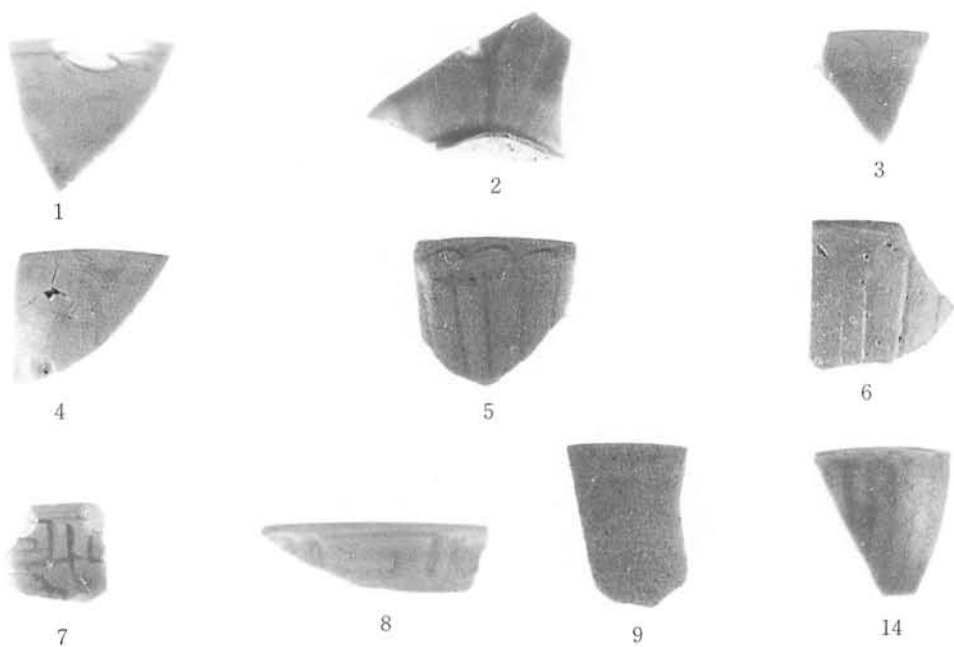
PL.40 第6号石積遺構(チンマーサ)C、南側より



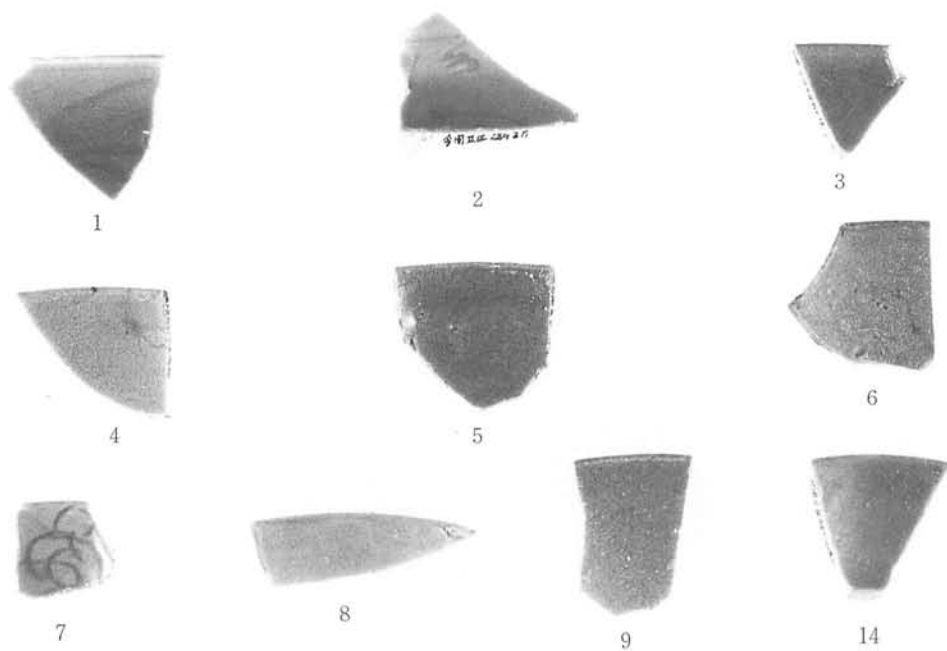
P.L.41 第6号石積遺構(チンマーサ)C、北側より



P.L.42 第7号石積遺構、西側より



PL.43 青磁・碗



PL.44 同内面



1



2



3



4



5



6



7



8

P L. 45 青磁・皿内面



1



2



3



4



5



6



7



8

P L. 46 同外面



10



11



12



13

PL.47 青磁・碗底部



1



2



3



4



5



6

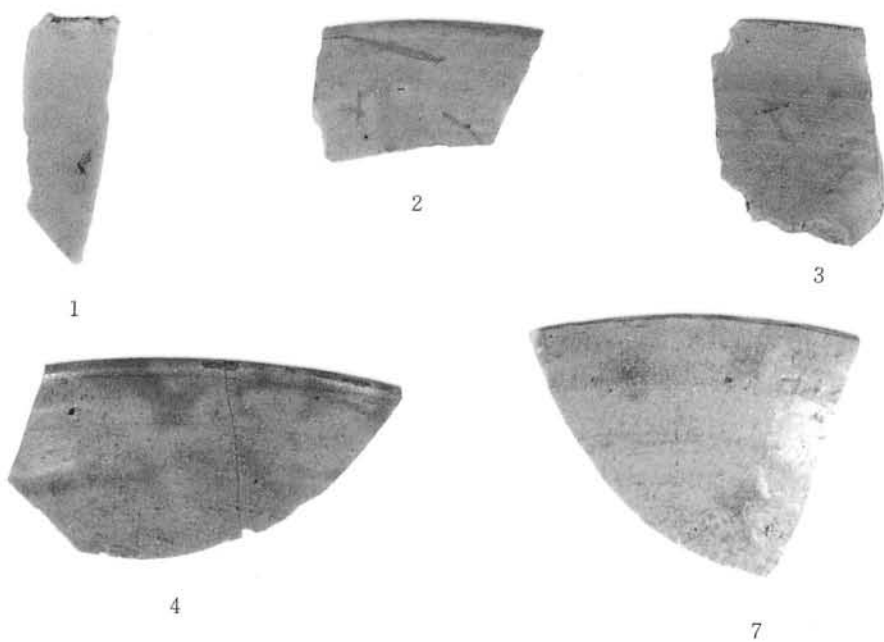


7

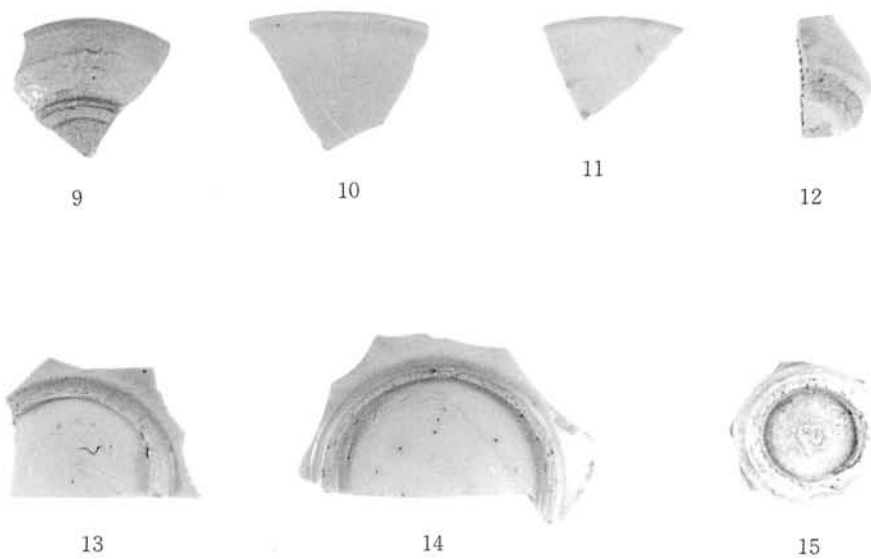


8

PL.48 青磁・盤(1~5)、壺(6~8)



PL.49 白磁・碗



PL.50 白磁・皿(9~14)、遊具(15)



5



6



8

PL.51 白磁・碗底部内面



5



6



8

PL.52 同外面



1



2



3



4



5



6



7



8



9



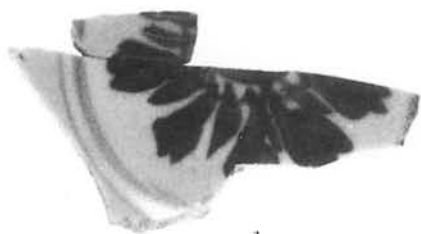
10



11



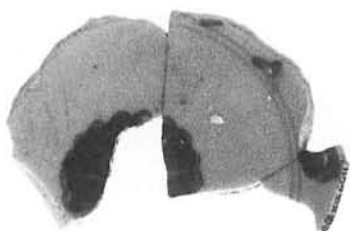
12



1



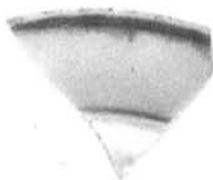
2



3



4



5



6



7



8



9

PL.54 染付・皿(1~5)、小壺(6)、瓶(7~9)



1



2



3



12



4



5



6



7



8



9

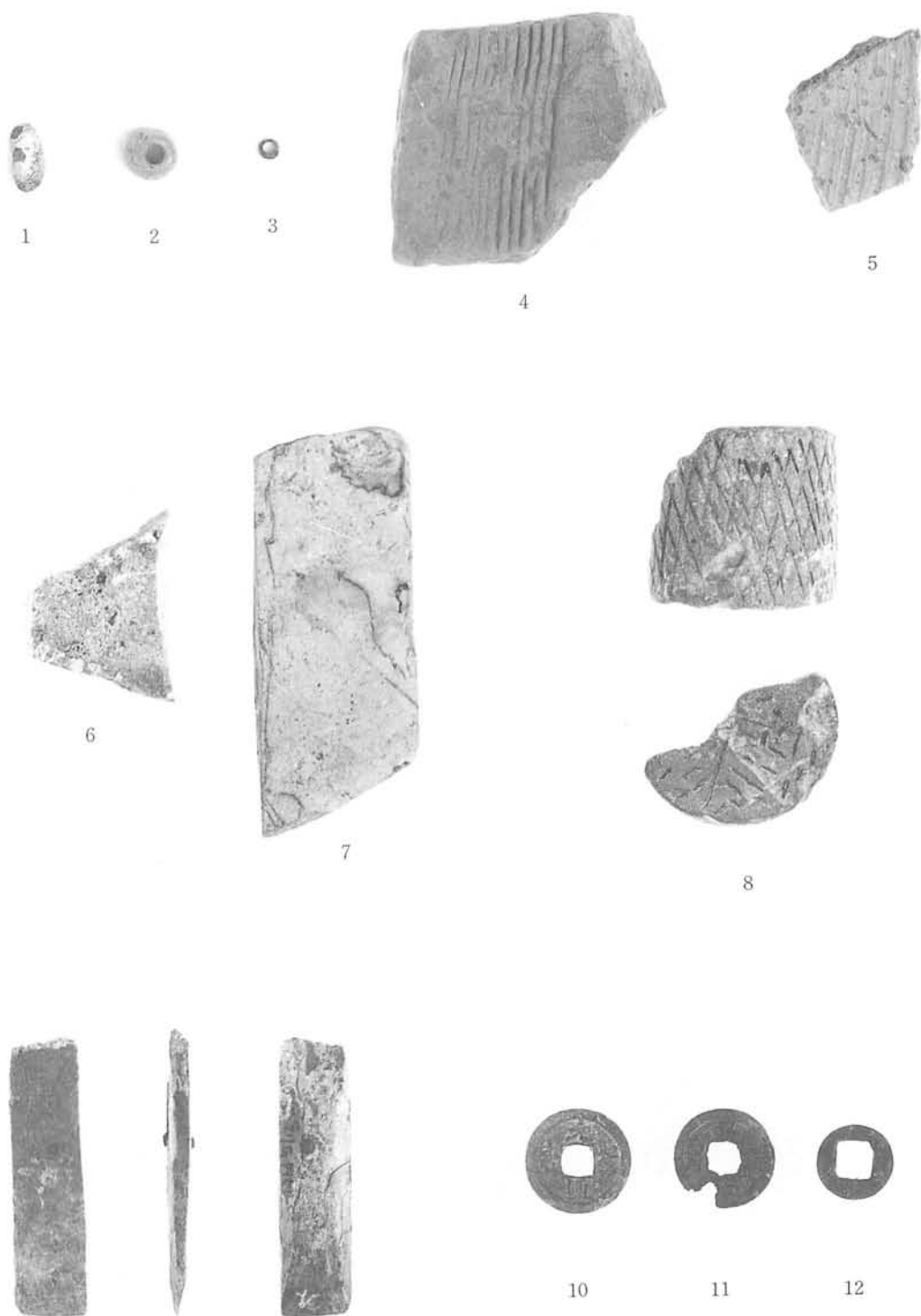


10

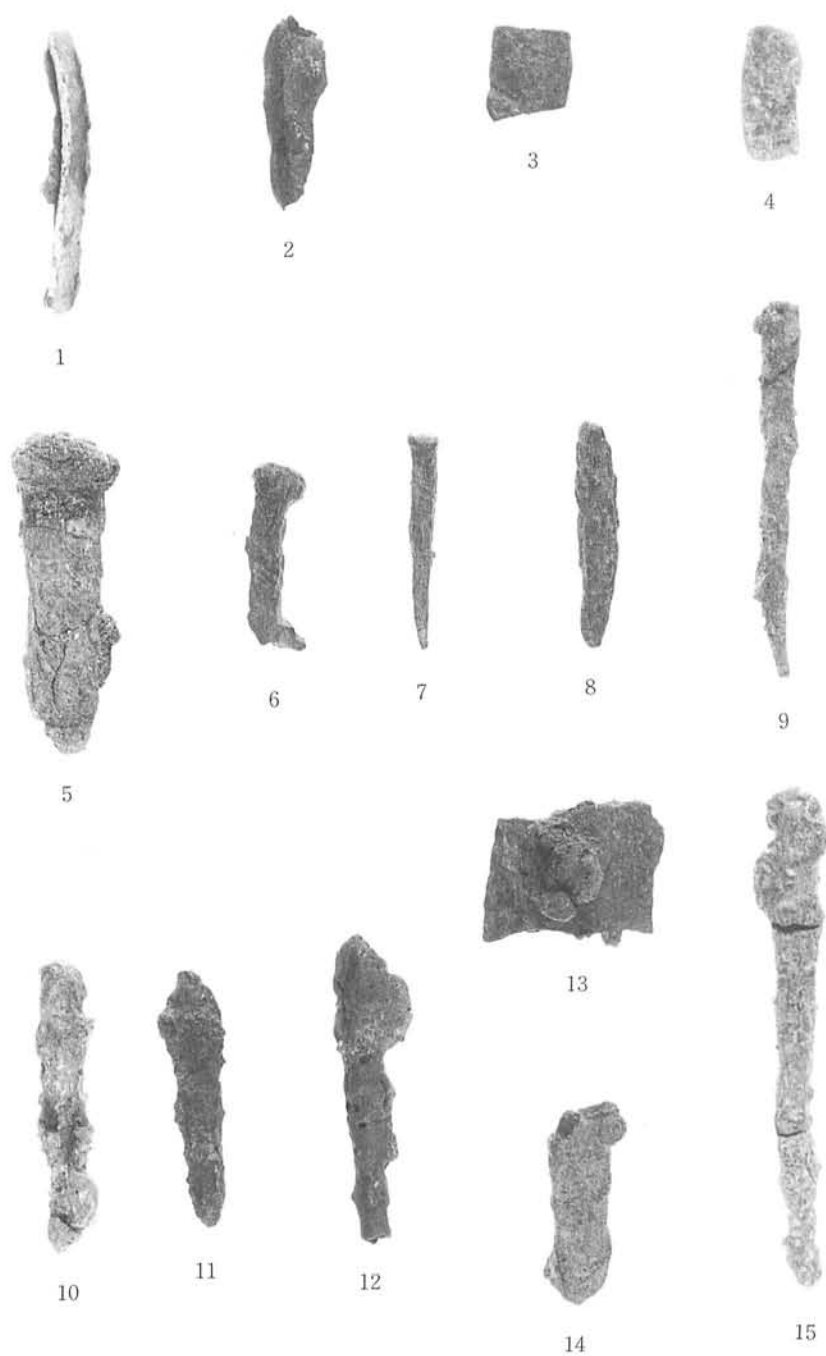


11

PL.55 褐釉(1~6・12)、三彩(7・8)、緑釉(9)、瑠璃釉(10)、翡翠釉



PL.56 ガラス製品(勾玉1、小玉2・3)、備前焼播鉢(4・5)、石製品(砥石6・7、キセルの雁首8)、骨製品(9)、貨銭(7~9)



P L . 57 銅製品(1~4)、鉄製品(鉄釘5~12、溜状製品13、篋状製品14・15)



1



3



2



4

PL.58 鉄滓



1



2



3



7



8



9



5



12



10



11

PL.59 貝殻

今帰仁村文化財調査報告書第12集

今帰仁城跡周辺遺跡
範囲確認調査報告書

発行 1986年3月
今帰仁村教育委員会
沖縄県今帰仁村字仲宗根232
TEL 09805-56-2647

印刷 沖縄高速印刷株式会社
TEL 0988-89-5513
